
出ましたっ！仮面ライダーカブトZ

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出ましたっ！仮面ライダーカブトZ

【Nコード】

N0127B

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

7年前、渋谷に隕石が衝突。渋谷は崩壊した。そして7年経った現在も、渋谷は復興される事は無かった。――隕石が持ち込んだ災いは、これだけでは留まらなかった。ワームと言う、地球外生命体を運び込み、人々を殺し、擬態。そして・・・

序章

「何だよ？お前・・・。」

男は、目の前に現れたもう一人の自分に、驚き戸惑った。

目の前の男は、ニヤリと笑うと、怪物・緑のサナギワームに変身した。

「うわああああ！」

男は悲鳴を上げて逃げ出した。

が、ワームが逸早く動き、男の前に先回りをした。

男はその場で立ち止まる・・・。

「うわああああ！」

男はワームの攻撃に悲痛の叫びを上げ、その場に倒れ、息絶えた。その様子を、ある人物が遠く離れた場所で、観察をしていた。

天道 総司。

自称く天の道を往き、総てを司る男>

本人は自己紹介だと言う。

ワームはそれに気付くと、天道の下へ迫った。

天道は迫って来るワームに、鉄拳を喰らわした。

ワームはその衝撃で、後ろへと跳ね返り、ゴロゴロと転がった。

ワームは根性で起き上がると、こう言った。

「人間ごときが俺様に触れるとはな。」

「人間では無く神様と呼んで貰いたいね。」

天道は直ぐ様ツツコミを入れる。

何だこの男は？

自分を神だと思っているのか。変な奴だ。

「黙れ！神は俺だ！」

ワームは言い放つと、天道に襲い掛かった。

しかし天道は、余裕の表情で、意図も簡単に、ワームの攻撃をかわした。

「失せる。」

天道が言うつと、サナギワームは爆発を起こして霧散した。と思いきや、爆発をしたのは、ワームの抜け殻だけで、本体は瞬時に脱皮をし、成虫ワームに姿を代えていた。

「しぶとい奴目・・・。」

そう言うつと、天道は成虫ワームに姿を変えた。

それは、カブトムシをモチーフにしており、色が赤い。

<カスクワーム>と言った所か。

「貴様!？」

そうか、貴様が裏切り者だな。」

「貴様ごとき、これで充分だ。」

訳の解らない事を言ったカスクワームは、目にも留まらぬ速さくクロックアップ>を発動し、成虫ワームを一瞬で倒してしまった。

カスクワームは天道に戻ると、さっさと立ち去った。

第01話：新生カブト・・・総ては此処から（前書き）

原作のキャラ設定、ぶち壊して書きます。

Fの皆様には、反感を買われるかもしれませんが、それでも良いです。

お婆ちゃんが言っていた。

どうせやるなら思い通りにやれってな。

俺も同感だ。

第01話：新生カブト・・・総ては此処から

天道家のリビング。

「お兄ちゃん、おっはよ!」

朝っぱらから、元気の良い可愛い女の子が、天道に向かって、元気良く挨拶をした。

てんどう

天道 じゅか 樹花。

天道 総司の妹で中学生だ。

樹花は席に座ると、

「いっただつきまーす。」

朝食を食べ始めた。

「お兄ちゃん、今日の朝ごはんGood!」

天道の作った料理は大好評だ。

「所でお兄ちゃん。」

「何だ?」

「いい加減、働くなり学校行くなりしたら?」

「俺は準備に時間が掛かるからな。」

天道は樹花の言葉を適当にあしらうと、樹花を残してガレージに行ってしまった。

ブルルッブルルッと、加賀美 新の携帯が鳴る。

加賀美は携帯を取り出し、通話のボタンを押した。

「はい、加賀美です。」

「田所だ。」

ワームが現れた。至急、来てくれ。」

「了解!」

加賀美はそう言うと、電話を切って田所の所へ向かった。

天道は、バイクに乗ってドライブをしていた。

するとそこへ、全身真っ赤のカブトムシが、何処からか飛んで来て、天道の横に並んだ。

天道はソイツをガシツと掴むと、

「変身！」

ベルトにセツトし、カブト・マスクドフォームに変身した。

「きゃああああ！」

トンネルの中で、女性が成虫ワームに襲われていた。

その悲鳴が、トンネルの中に響く。

しかしワームは、問答無用で女性に襲い掛かる。

そこへ一発の光弾が、ワーム目掛けて飛んで来た。

その光弾は、ワームにヒットし、ワームを怯ませた。

その瞬間、一台のバイクが、ワームに激突した。

ワームはバイクに弾かれ、ゴロゴロと地面を転がる。

バイクはキィーツと音を立てつつ、向きを変えて止まった。

そのバイクに跨っているのが、カブト・マスクドフォームと言う事は、言うまでも無い様だ・・・。

ワームは立ち上がると、

「キュー！」

と泣いて、カブトに迫った。

カブトはカブトクナイガンを構えると、迫るワームに光弾を浴びせまくった。

ズガンツ！ズガンツ！と次から次へと、光弾が発射される。

光弾を喰らったワームは、数メートル程飛ばされたかと思うと、今度はクロツクアップをしてカブトに接近した。

カブトは、カブトクナイガンを上下逆さに持ち替えると、その先に付いた鋭い刃を迫り来るワームの腹に刺し込んだ。

その瞬間、ワームは勢い良く、爆発して霧散した。

傍で見ていた女性は、爆発で起きた爆風によって吹っ飛ばされ、トンネルの壁に激突し、そのまま気を失った。

カブトは、女性を抱えると、トンネルを出て行った。

女性が目を覚ましたのは、天道家二階の総司の部屋のベッドの上。

「目が覚めたか。」

天道は目を開けた女性に声を掛けた。

女性はバツと起き上がると、

「此处は!？」

「俺の家だ。」

天道はそう答えた。

「あの、私・・・。」

「あんたはトンネルの中で倒れていたんだ。」

天道は言い訳をすると、

「あんた、名は？」

といきなり聞いた。

「間宮 麗奈。」

女性はそう言った。

天道は右手を天にかざし、

「お婆ちゃんはどう言っていた。

天道の道を往き、総てを司る男・・・俺の名は、天道 総司、と。」

その言葉、何時聞いても、自分をく神>だと言っている様に聞こえるのは、気のせいだろうか。

（コイツが天道か。）

（コイツが天道か。）

麗奈は心の中で呟いた。

「所で麗奈。何か食べるか？」

麗奈の腹が、グウツと天道の言葉に答えた。

「なら、とびつきり美味しい料理を御馳走してやる。」

そう言つて、天道はキッチンに向かった。

麗奈は手を合わせ、

「頂きます。」

出来上がった料理を食べる麗奈。

「美味しい。」

麗奈は思わず口にした。

「当然だ。最高級の食材を使っているからな。」
最高級の食材。一体どんな物なのだろうか？

第01話：新生カブト・・・総ては此処から（後書き）

麗奈怪しちベンベーン！

第02話：カブト&ウカワーム

「キャストオフ。」

蜂をモチーフにしたザビーは、ゼクターウィングを展開後、バインドリングに指を引っかけ、セットアップサークルを基点に、ザビーゼクターを回転させた。

「Cast off!」

の機械音と共にアーマーが吹き飛び、

「Change wasp!」

とライダーフォームに移行した。

「A小隊、B小隊は左右からマシンガンで攻撃!

C小隊はブレードで接近戦に備えろ!」

ザビーの指示で、シャドウ隊は班ごとに別れ、それぞれ攻撃を開始した。

ダダダダダツと、マシンガンから無数の弾丸が発射される中、C小隊はブレードで接近攻撃をしている。

「脱皮するぞ。気を付ける!」

素手でワームと戦ってるザビーは、各小隊に注意を促した。

「Clock over.」

突然の音声と共に、戦場にカブトが現れた。

同時に、サナギワーム数体が爆裂霧散する。

「カブト・・・。」

呟くザビーと、それを見つめるシャドウ隊。

その時、脱皮を終えたワームが、クロックアップをし、シャドウ隊を一瞬で蹴散らした。

「うわあ!」

周囲からはシャドウ隊の皆様の悲痛の叫び声が聞こえる。

「助けなくて良いのか?」

カブトに問われ、我に返ったザビーは、

「クロックアップ。」

ゼクトバツクル・トレーススイッチに触れた。

「Clock up.」

電子音と共に、ザビーが戦場から姿を消した。

同様に、カブトもサイドバツクルを叩き、クロックアップを発動してザビーを追う。

「カブト、挟み撃ちだ。」

「良いだろう。」

カブトとザビーは、息の合った動きで、ちょこまかと動くワームを、いとも簡単に挟み撃ちにした。

カブトはフルスロットルを順番に押す。

「One, two, three.」

カシャツと、ゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

もう一度展開。

「Rider kick!」

ライダーパワーがチャージされ、ライダーキックが発動した。

「ライダーステイング!」

ザビーがフルスロットルを押す。

「Rider stinging!」

ライダーパワーがチャージされ、ライダーステイングが発動すると、二人は同時に、ワームにトドメを刺した。

「Clock over.」

クロックアップが解除され、時間の流れが元に戻る。

その瞬間、ワームは爆発を起こし、霧散して消え去った。

同時に、カブトが勢い良く吹っ飛んだ。

何かがカブトに当たった様だ・・・。

「カブト!？」

ザビーはカブトに近付こうとしたが、目の前にワームが現れ、それを邪魔した。

そのワームは、蟹をモチーフにしたウカワームだった。

カブトの視界に、ソイツが入ると、カブトはソイツに攻撃を仕掛けた。

が、カブトの攻撃は見事にあしらわれ、反撃を受けてしまった。

ウカワームは、怯んだカブトに、猛攻撃をする。

ウカワームの猛攻撃に、手も足も出ないカブトは、悲痛の叫び声を上げるだけだった。

「プットオン！」

カブトはゼクターホーンをデフォルトの位置に戻した。

「Put on！」

カブトの全身をマスキドアーマーが覆う。

しかしマスキドフォームになっても、ダメージを若干軽減出来るぐらいで、完全に防御する事は出来なかった。

（強い・・・）

心の中で呟くカブト。

「ライダーの力はそんな物か？」

ウカワームの横に、間宮 麗奈の幻体が現れて言った。

「Rider stinging！」

カブトに猛攻撃を喰らわしているウカワームに、ザビーはライダーステイングを放った。

（麗奈・・・）

何を思ったのか、カブトはウカワームとの位置を入れ替え、ウカワームを庇った。

ザビーは咄嗟に、ライダーステイングを解除し、そのままカブトに突っ込んだ。

カブトとザビーは、一緒に地面をゴロゴロと転がった。

その様子を窺ったウカワームは、

「どうやら、カブトは私を護ってくれた様だ。」

とザビーに向かって言った。

「何!？」

と反応するザビー。

「どういう事だ！？カブト！」

怒鳴り散らすザビー。

「見ての通りだ。」

カブトはそう言つて、ザビーを空中に蹴り飛ばして起きあがると、落ちてきた所で得意の回し蹴りを喰らわせた。

ザビーは勢い良く吹っ飛び、変身が解けてしまった。

「お、覚えていろ！」

矢車 想はその場から立ち去った。

「何故だ。何故敵であるお前が、私を助けた？」

ウカワームの問いに、カブトは振り向き様に、人差し指を立ててこ
う言う。

「お婆ちゃんが言っていた。

受けた借りは最高の振る舞いで返せつてな。

言った筈だ。借りは必ず返すと。」

カブトは変身を解くと、

「まさかお前がワームだったとはな。」

と付け足した。

天道の姿を見たウカワームは、麗奈に姿を変えた。

「すまない。隠すつもりは無かった。

それと、さっきの事は謝る。許してくれ。」

麗奈は天道に頭を下げた。

「その事なら気にするな。」

そう言つと、天道は去って行く。

「帰ったら晩飯だ。」

そう言い残して・・・。

第02話：カフト&ウカワーム（後書き）

結局、ウカワームは何がしたい訳？

第03話：熱血漢

「おはようございます!」

ドアを開けて元気よく挨拶したのは、熱血漢の加賀美^{かがみ}新だ^{あらた}。

「遅いぞ加賀美!」

「すみません。」

頭をさげる加賀美。

「所で、岬さんは?」

「岬なら、5分くらい前に出て行つたよ。」

「もう行つたんですか?」

「加賀美、時計を見てみる。」

「時計?」

加賀美は腕時計を確認する。

短針は10を指していた。

「あああああ!」

加賀美は奇声を発すると、何処かへ駆け出して行つた。

都内のとある学校。

岬は校門の前で、校門の向こうをジッと見詰めていた。

「岬さあん!」

加賀美が走つて来た。

「遅いわよ。」

貴方がいない間に、ワームに襲われていたらどうするのよ?」

「すみません。」

岬に頭を下げる加賀美。

その時、黒装束の怪しい女が、学校の中へ入って行つた。

「アイツは!」

加賀美は女を追い掛けた。

「加賀美君!」

と言う岬の声も聞かずに・・・。

「待て！」

と、加賀美は女を追ったが、途中で姿を見失ってしまった。

「何処へ行った!?」

加賀美は辺りを見渡した。

そんな加賀美の背後に、黒装束の女が立った。

「私に何か用か？」

黒装束の女は問う。

加賀美は振り向いて構えた。

黒装束の女はニヤリと笑い、手を顔の前に持って来ると、ウカワームに変態した。

加賀美は右手を高く上げ、飛来したガタックゼクターを掴んだ。

「変身！」

加賀美はガタックゼクターをベルトに差し込み、

「Henshin！」

と、ガタック・マスクドフォームに変身を遂げた。

「うわああああ！」

ガタックは叫びながら、ウカワームに突進をする。

しかしウカワームは、ひらりと身かわして、ガタックに蹴りを入れた。

ドテツと転ぶガタック。

「クソ！」

ガタックは立ち上がると、

「キャストオフ！」

ゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アイマーが弾け飛び、ライダーフォームに移行する。

「Change! stage beetle！」

校長室にいた天道は、

「何処をほつつき歩いているんだ？」
と、独り言を言った。

その時、校庭の方から大きな爆音が聞こえた。
同時に、室内にカブトゼクターが現れ、天道の頭上をグルグル飛び
回る。

「やれやれ・・・。」

天道は呟くと、校庭へと向かった。

シャキーン！

金属音を立てながら、ガタツクがウカワームに、ダブルカリバーを
振り下ろした。

「うわあ！」

ウカワームは奇声を発し、右腕の巨大なハサミで、ガタツクを叩き
付けた。

するとバチツと火花が散り、ガタツクの〇シグナルが壊れてしまっ
た。

だが、ガタツクはそんな物気にせず、ウカワームに猛攻撃を始める。
シャキーンツ、ズドーン！

ウカワームから火花が散る。

「トドメだ！」

ガタツクはフルスロットルを押す。

「One、two、three。」

カシャツとゼクターホーンを展開し、

「ライダーキック！」

と叫び、再び展開。

ライダーパワーがチャージされ、ライダーキックが発動する。

「Rider kick！」

それと同時に、ガタツクは跳び蹴りを放った。

しかしガタツクの攻撃は、何者かによって防がれてしまった。

「何！？」

驚くガタツク。

何故ならば、ガタツクの攻撃を、カブトが腕一本で受け止めていたからだ。

「そこをどけ！」

ガタツクは叫ぶが、カブトは一步も動こうとしない。

「俺は誰も指図も受けない。俺の居場所を決めるのはこの俺だ。」

カブトはそう言って、ガタツクの足を掴むと、グルグルと回転をして空中に放り投げた。

その隙にカブトは、カブトクナイガンを構え、ガタツクに向けてズガン！ズガン！と光弾を連射した。

光弾がヒットしたガタツクは、垂直に落下し、地面に叩き付けられた。

それと同時に、ガタツクの変身が解けてしまった。

「カブトオ！」

加賀美は叫んだが、状況が一変する事は無かった。

「麗奈。」

カブトの問い掛けに、ウカワームは麗奈に姿を変えた。

「何故戦った？」

その質問に麗奈は、

「ソイツが私に襲い掛かって来たからだ。」

「無駄な戦いは避けると言った筈だ。」

カブトはそう言った後、変身を解き、麗奈と校舎へ入って行った。

（あいつら・・・何をするつもりだ？）

第03話：熱血漢（後書き）

天道ってワームに寝返ったの？

第04話：戦場は学校

天道と麗奈は、校長室に二人つきりでした。

「お前が我々の仲間になるとはな。」

「勘違いするな。俺は俺のやり方でやっているだけだ。」

「そう言う事においてやろう。」

そう言うて、麗奈は校長室から出て行った。

天道はフウツと溜め息を吐くと、麗奈を追う様に校長室を出た。

体育館では、生徒達が体育の授業を受けていた。

その様子を、天道と麗奈は、静かに見詰めていた。

「本当にやるのか？」

「当然だ。」

天道はそう言うのと、麗奈と一緒に体育館へ入って行った。

それに気付いた体育教師は、

「何なんですか？あなた達。」

と、二人に近付いて来た。

天道は問答無用で、教師を蹴り飛ばした。

「うわ！」

教師は気を失った。

その瞬間、生徒達の動きが止まり、視線が天道達の方へ向けられた。麗奈はニヤリと笑うと、右手を顔の前に出し、ウカワームに変態をした。

体育館中に生徒の悲鳴が木霊し、その場から逃げ出す生徒。しかし数人だけ、そこに残った者がいた。

「逃げないと言う事は・・・貴様らがワームだな。」

天道が言うのと、カブトゼクターが飛来し、彼の手のひらに納まった。すると残った数人は、緑色のサナギワームに変態した。

続いて天道も、カブトゼクターをベルトにセットし、

「Henshin!」

と、カブト・マスクドフォームに変身をした。

ワーム達は全員揃って、脱皮を開始した。

手前二体がビエラワーム、ランピリスワーム。

後三体がアラクネワーム・ルボア、同・ニグリティア、同・フラバス。

ワーム五体は一斉にクロックアップをし、カブトに飛び掛かった。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開し、

「Cast off!」

アーマーを弾き飛ばし、ライダーフォームに移行する。

「Change beetle!」

それと同時に、ワーム五体は、弾け飛んだアーマーにより、吹っ飛ばされて壁にめり込んだ。

ワーム五体は壁から抜け出すと、再度クロックアップをし、カブトに接近した。

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up!」

と、クロックアップを発動させた。

迫り来るワームに、カブトはカブトクナイガンで攻撃。

アラクネワーム・ルボアを撃破!

そしてニグリティア、フラバスの順に倒し、ビエラワームとランピリスワームの二体が残った。

「Clock over!」

クロックアップが解除され、時間の流れが元に戻った。
するとカブトは、

「One、two、three!」

フルスロットルを順番に押し、ゼクターホーンを展開した。

「ライダー、キック。」

カシャツと再び展開。

ライダーパワーが溜まると、ライダーキックが発動した。

「R i d e r k i c k !」

カブトは迫り来るビエラワームとランピリスワームに、回し蹴りを叩き込んだ。

二体のワームは同時爆発を起こし、緑の血を吹き出して霧散した。

ワームを倒したカブトは、ウカワームの方を向き、右手を高く上げた。

第04話：戦場は学校（後書き）

結局、天道は何がしたい訳？

いまいちやりたい事が解らないナレーターです。

作：「解らなくて結構です。」

え？

第05話：天道の企み

都内某所にある、とあるお店、ビストロ・ラ・サル。

この店に、熱血漢を漂わせた、一人の男が入ってきた。

「加賀美、遅いぞ。」

今言ったのは、<日下部 ひより>と言う、20歳前後の若い女性だ。

「それよりどうしたんだ？その格好・・・。」

ひよりは加賀美の、左腕にギプス、右足にギプスを付けた格好を見て聞いた。

「ちよつと転んじやつて。」

加賀美はそう答える。

だがひよりは、

「転んだだけでそうなるか？」

「いや、実は喧嘩を・・・。」

「誰と喧嘩をしたんだ？」

突然口をはさんだのは、あの天道だった。

加賀美は指を差し、

「ああ！お前！」

と怒鳴り散らす。

「お前じゃない、俺様だ。」

「そんな事どうでも良い！何でお前が此処にいるっ？」

「お前に会いに来た。」

ZECTについて、聞きたい事がある。」

加賀美は慌てて、

「外に出ようか？」

と、天道を外に連れだした。

「ZECTについて聞きたいんだよな？」

加賀美は天道に確認をした。

天道は、ああ、とだけ答えた。

すると加賀美は、ZECTについて語り始める。

「ZECTは、ワームと言う地球外生命体から、人類を守る為に作られた機密組織だ。」

しかしワームの持つクロックアップには、為す術が無かった。

そこでZECTは、マスクドライバーシステムを作り、クロックアップに対抗出来る様にしたんだ。」

「なるほどな。」

「所でお前、カブトでありながら、何故ワームと一緒にいる？」

「ZECTを潰す。」

「えっ？」

突然の言葉に、驚く加賀美。

「お前、それがどう言う事が解ってんのかっ？」

加賀美は天道に怒鳴った。

すると天道は、こんな事を口にした。

「お前、ZECTの事、よく知らないだろ？」

ZECTは、人類を守ると言いつつ、ワームに荷担している。

だから俺は、そんな屑共を消す為、ワームと一緒に行動している。

そうすれば、ZECTは必ず、親玉を送り込んで来る筈だ。」

「どう言う意味だ？」

「奴らはワームを倒す為に作られた組織だ。」

ライダーがワームと行動していると知れたらどうなる？」

「言ってる事が無茶苦茶だぞ？」

確かにその通りだ。

だが、こう考えてみてはどうだろうか？

人類を守ると言っているZECTがワームを倒しながら、ワームと組んで地球を征服する。

そうする事で、本当の企みを隠し通そうとしているのでは無いだろうか？

天道はそれを知っているからこそ、ワームと一緒にいるのだろう。
「信じられねえよ、そんなの・・・。」

加賀美は、ビストロ・ラ・サルに戻って来ると、客席に座り込んだ。
(アイツの言う事、信じて良いのかなあ?)

加賀美は心の中で呟いた。

第05話：天道の企み（後書き）

いまいち解らない天道の考え・・・。

第06話：裏切り

加賀美と別れた天道は、自宅へ向けて、ゆっくりと歩いていた。それを、一人の男が後を付けている。

天道はソイツに気付くと、気付いていない振りをし、そのまま歩き続けた。

（アイツさえいなくなれば、あの方は戻ってくる筈だ。）

天道を付ける男は、心の中でそう呟いた。

天道は足を止め、

「さつきから後を付けてる奴。」

男はギクツとすると、天道の死角に隠れた。

天道は後を振り向くが、誰もいない事に気付くと、

「気のせいか。」

と、再び歩き出した。

その瞬間、例の男が飛び出し、ジェノミアスワームに変態して天道に襲い掛かった。

が、天道は素早くかわし、反撃を行った。

ジェノミアスワームは天道に蹴り飛ばされ、追い打ちを喰らい、地面に叩き付けられた。

「不意打ちのつもりか？」

「くっ、クツソ！」

ジェノミアスワームは起きあがると、目にも留まらぬ速さくクロツクアップで、天道に接近した。

しかしワームである天道には、その動きが見えていた。

天道は接近するジェノミアスワームを避け、飛来したカブトゼクターを掴んだ。

「変身！」

天道はゼクターをベルトにセット。

「Henshin！」

天道はカブト・マスクドフォームに変身した。

「やるからには・・・本気で来い！」

カブトは怒鳴り散らすと、ジェノミアスワームにカブトクナイガン
を向け、数発の光弾を放った。

が、クロックアップをしているワームにとって、そんな物を避ける
事など造作ない。

カブトはカブトクナイガンを回転させ、上下逆さにすると、それを
接近するワームの腹に叩き込んだ。

「こ、こんな所で！」

ワームは後へ退き、地面に穴を開けて潜った。

そして次の瞬間、カブトの足下に穴が開き、カブトは穴の中に引き
込まれてしまった。

「地面の下は卒業した！」

叫んだカブトは、脱出を試みるが、ワームの凄まじいパワーにより、
身動きが取れない。

「キャストオフ！」

ゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

電子音は鳴った。

しかしアーマーは弾け飛ばなかった。

「馬鹿なっ？」

想定外の出来事に驚きを隠せないカブト。

その間にもカブトは、地中深くへと引き込まれて行く。

それから暫くすると、カブトは地球のど真ん中、マグマのある層に
侵入した。

その瞬間、アーマーが一気に弾け飛んだ。

しかし状況は変わらない。

「そのまま燃え尽きてしまえ！」

ジェノミアスワームは、カブトを踏み台にし、上へ飛び上がった。

「逃がすか！」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up!」

と、クロックアップを発動した。

カブトはマグマに着地し、ワームを追う様に、上へと飛び上がった。

ジェノミアスワームは、地上へ飛び出すと、人間に擬態した。

「これで、アイツも・・・。」

男は呟くと、ゆっくりと歩き出した。

その瞬間、地面の下からカブトが飛び出して来た。

「何っ?」

男は再びワームに変態し、カブトに襲い掛かった。

「貴様、何故生きてるっ?」

ライダーとは言え、マグマに落ちたら一溜まりもない筈!」

「俺はあの時、クロックアップをし、マグマを足場に飛び上がったんだ!」

そう言ったカブトは、迫り来るジェノミアスワームに鉄拳を叩き込んだ。

ジェノミアスワームは、カブトの鉄拳をまともに喰らうと、数メートル程吹っ飛び、地面に叩き付けられた。

その隙に、カブトはフルスロットルを押す。

「One、two、three!」

カブトはゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

再び展開すると、ライダーパワーがチャージされ、ライダーキックが発動する。

「Rider kick!」

電信音と共に、カブトは落下を利用し、ジェノミアスワームにライダーキックを浴びせた。

が、ジェノミアスワームには、全く効いていなかった。

「そんな物、痛くも痒くもない!」

傷一つ負っていないジェノミiasワームは、両手を組み、上からカブトを叩き付けた。

地面に叩き付けられるカブト。

そのカブトの背中を、ジェノミiasワームは足で踏みつけた。同時にカブトの変身が解け、ゼクターが何処かへ飛んで行く。

「トドメを刺してやる。」

ジェノミiasワームは、天道を片手で持ち上げ、頭の角を天道に突き刺した。

「うおおああああ！」

ジェノミiasワームに体液を啜^{すす}られる天道は、悲痛の叫び声をあげた。

「貴様、ワームかつ？」

その問いに天道は、

「違うな。」

俺は・・・ネイティブだ！」

「ネイティブだとっ？」

驚くジェノミiasワームをよそに、天道はカスクワームに変態する。そして、自力で束縛を解くと、反撃に出た。

「うわああああ！」

叫び声を上げ、ジェノミiasワームに攻撃するカスクワーム。

ジェノミiasワームは悲痛の叫び声を上げると、クロックアップをして逃げ出した。

「待て！」

カスクワームもクロックアップをし、ジェノミiasワームを追う。

「何処までもしつこい奴目・・・。」

ジェノミiasワームが呟いた瞬間、彼の目の前にコキリアワームが現れた。

麗奈を補佐する黒装束の女の正体だ。

ジェノミiasワームはその後に隠れると、

「助けて下さい。」

と、コキリアワームに助けを求めた。

だがコキリアワームは、

「誰がお前など。」

そう言つて、ジェノミアスワームに攻撃をした。

避けるジェノミアスワーム。

「何をするんですかつ？」

ジェノミアスワームは問うが、コキリアワームは問答無用とでも言うかの様に、ジェノミアスワームに猛攻撃を加える。

ジェノミアスワームは、必死になって逃れようとするが、カスクワームが目の前に立ちはだかった。

挟み撃ちにされたジェノミアスワーム。

カスクワームは、ジェノミアスワームを頭の角で突き刺し、撃破した。

ジェノミアスワームを倒したカスクワームは、右手を上高く上げた。

その手は太陽と重なり、眩しく光る。

第06話：裏切り（後書き）

展開が理解出来ねえ。

ウカワームとかコキリアワームとか何なの？

天道に手を貸しちゃってさ・・・。

作：「深入りするな！知らない方が良い秘密もある！」

第07話：ワームの作戦

「待て。」

家から出ようとした天道を、麗奈が引き留めた。
立ち止まる天道。

「何処へ行く？」

「ワーム如きに答える必要があるか？」

「大ありだ。答えて貰おう。」

「断る。」

麗奈の要望を拒否した天道は、家を出て行った。
虫の居所が悪くなった麗奈は、手下のコキリアワームを呼び、天道の後を付けさせた。

「ひより、今日のまかないは何だ？」

天道はビストロ・ラ・サルに入るなり、いきなり訊ねた。

しかしひよりの返事は無く、代わりに竹宮 弓子が答えた。

「ひよりちゃんなら来てないわよ。」

「来てない？」

「今日、朝一で来る筈だったんだけどね・・・。」

弓子は心配した様子で言った。

「そうだ、ひよりちゃんを迎えに言っただけよ。」

「良いだろう。但し、条件がある。」

「条件？」

「ツケの代金をチャラにする事だ。」

天道はそう言うが、

「それは駄目。」

あさっり断られた。

しかし天道は、そんな事は気にも止めなかった。

天道はサルを出ると、ひよりを迎えに行った。
とは言うものの、天道はひよりの家を知らない。

天道は仕方なく、都内を歩き回った。

だが、ひよりを見付ける事は出来なかった。

そんな時、十数匹のサナギワームが現れ、天道を囲んだ。

「ほお。」

カブトゼクターが飛来し、天道はそれを掴んだ。

ワーム達は、変身させるか！と言った感じで、天道に飛び掛かった。

「変身！」

天道はカブトゼクターをベルトにセット。

「Henshin！」

天道はカブト・マスクドフォームにした。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーが弾け飛び、迫り来るワームを撃破すると、カブトホーン
が起きあがり、ライダーフォームに移行した。

「Change beetle！」

だが、まだワームは数体残っている。

その内の一匹が、赤く変色した。脱皮の合図である。

サナギワームは、脱皮をすると、ベルクリケタスワームに姿を変え
た。

そいつは茶色で、スズムシをモチーフにしていた。

こいつは、羽を擦り合わせる事で、発音境から攪音波を発生させ、
相手を自由に操る事が出来る厄介なワームだ。

「クロックアップ。」

カブトがサイドバックルを押すと、

「Clock up！」

クロックアップが発動し、全ての時間の流れが遅くなった。

その間にカブトは、数体のサナギワームを瞬殺し、ベルクリケタス

ワームとの戦いに移行した。

「ふわ！」

カブトはベルクリケタスワームを殴り飛ばす。

吹っ飛ばされたベルクリケタスワームは、羽を開いて空高く飛び上がった。

そして急降下をし、カブトに体当たりを行った。

しかしカブトが、それを飛び退いてしまい、ベルクリケタスワームは地面に頭を打ち付けてしまった。

「One、two、three！」

カブトはゼクターホーンを展開し、

「ライダー、キック。」

もう一度展開すると、ライダーパワーが溜まり、ライダーキックが発動した。

「Rider kick！」

カブトは音声に合わせて回し蹴りを叩き込もうとしたが、ベルクリケタスワームが当たる寸前の所で羽を擦り合わせ、攪音波を発生させた。

「うわああああ！」

苦痛の叫び声をあげたカブトは、キックが当たる寸前に変身が解けてしまった。

天道はその場に倒れ、頭を押さえ付けて藻掻いた。

「うわああああ！」

再び苦痛の叫び声を上げると、天道の瞳が一瞬だけ赤く光った。

その直後、天道は落ち着きを取り戻して静かになった。

ベルクリケタスワームは、加賀美の弟の加賀美 亮に擬態すると、天道にこう言った。

「加賀美 新を連れて来い。」

天道は素早く立ち上がると、

「お任せ下さい。」

そう言って、お辞儀をした。

その様子を、少し離れた所から見咎める黒装束の女の姿が・・・。

第07話：ワームの作戦（後書き）

ナ：「天道君、ベルクリケタスワームに操られてしまいました。

今後の展開が気になる所ですが、どうでしょうか？ゲストの天道君。

」

天：「さあな。

だが、俺は必ず、奴を倒す・・・総てを司る男だからな。」

ナ：「頑張つて。」

第08話：俺様っ！

「巧く行つた様だな。」

黒装束の女が亮に言った。

「ええ。」

亮は返事を返した。

「これで、カブトとガタツクは、我々の手に……。」

「天道。話して何だ？」

加賀美は渋谷廃墟の前で一人佇んでいる天道に声を掛けた。

「お前に合わせたい方がいる。」

「合わせたい方？」

「付いて来れば解る。」

そう言つて、天道は加賀美を、とある野球場へ連れて行つた。

天道と加賀美は、野球場へやって来た。

「此処つて……。」

加賀美は呟いた。

「お前の弟が行方不明になつた場所だ。」

「お前……何故その事？」

「本人に聞いたからだ。」

天道が言つと、それに応える様に、ある人物が二人の前にやって来た。

「お兄ちゃん！」

ある人物は加賀美に向かって言つた。

「亮、亮なのかつ？」

「そうだよ。お兄ちゃん。」

加賀美と亮は互いに抱き合つた。

その時、亮は一瞬、ニヤリとほくそ笑んだ。

「お兄ちゃん、僕達の仲間になろう?」

「僕達?」

加賀美は亮を離した。

すると亮の後ろに、数体のサナギワームが並んでいた。

「僕の仲間が、お兄ちゃんに擬態したいって。」

「亮……。」

加賀美は、ガタツクゼクターを召喚した。

「天道、どう言う事だ?」

「こう言う事だ。」

加賀美に続いて、天道もカブトゼクターを召喚した。

天道と加賀美は、互いにゼクターを掴むと、

「変身!」

二人は同時にセツトし、

「Henshin!」

同時にライダーに変身する。

続いて亮も、ベルクリケタスワームに変態。

「うわああああ!」

ガタツクは奇声を発しながら、サナギワーム達にガタツクバルカン
を撃ち込んだ。

サナギワーム達は次々に爆裂霧散し、ベルクリケタスワームだけに
なった。

「キャストオフ!」

ガタツクはゼクターホーンを展開し、

「Cast off!」

アーマーを弾き飛ばし、ガタツクホーンを起こし、ライダーフォー
ムに移行した。

「Change stag beetle!」

又カブトは、ベルクリケタスワームの前に移動し、鉄壁となつて無
数のアーマー攻撃を受け止めた。

「天道!」

やっぱりお前はっ、ワームの味方をするのかっ？」

ガタツクはカブトに怒鳴り口調で問う。

だがカブトは、ガタツクの問いなど耳にせず、ゼクターホーンに手を掛ける。

「キャスト・・・オフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーが弾け飛び、同時にガタツクを吹き飛ばし、カブトホーンを起こしてライダーフォームに移行。

「Change beetle！」

ガタツクは地面に着地すると、カブトを押し退け、ベルクリケタスワームに攻撃を仕掛けた。

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、クロックアップを発動させ、ガタツクの前に移動した。

「お前の相手は、俺だ！」

そう言っつて、ガタツクを殴りつける。

だがガタツクからは、カン！と言う音が鳴っただけで、ガタツクにダメージは無い。

それでもカブトは、殴る、蹴るなどして、ガタツクに攻撃をし続ける。

（クソ！クロックアップ出来ねえ！）

ガタツクは、カブトのラッシュ攻撃を浴びながら、心の中で叫んだ。

「その調子だ。やってしまえ。」

と、ベルクリケタスワーム。

カブトはトドメを刺す為、フルスロットルを順番に押す。

「One、two、three！」

ゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

カブトがソレを再び展開すると、ライダーパワーがチャージされ、ライダーキックが発動する。

「R i d e r k i c k !」

電子音と共に、カブトは後にいるベルクリケタスワームに、回し蹴りを叩き込んだ。

「待て！やる相手が！」

時既に遅し！

カブトの回し蹴りが、ベルクリケタスワームに直撃していた。

「死ぬ前に一つ言っておく！

俺は誰の指図も受けない。倒す相手は、俺が決める！」

カブトがそう言つと、ベルクリケタスワームは緑の血を吹き出し、爆裂霧散した。

「C l o c k o v e r .」

クロックアップが解除されると、カブトはその場に倒れた。

恐らく、ベルクリケタスワームの攪音波催眠が解けたのだろう。

ガタツクは変身を解き、カブトに駆け寄った。

「天道っ、しっかりしろ！」

加賀美の一言で、カブトは意識を取り戻した。

「加賀美か。

俺は今まで、何をしていたんだ？」

加賀美は、カブトの思わぬ発言に驚いた。

「お前、何も覚えていないのか？」

「ああ。」

「お前っ、俺を此処に誘い出してっ、殺してワームに擬態させようとしたんだぞ！」

加賀美はカブトに怒鳴り散らす。

「すまない。

どうやら俺は、奴に操られていたみたいだ。」

「奴？」

「茶色いスズムシのワームだ。」

「それならお前、自分で・・・って、それも覚えていないのか？」

カブトは起きあがると、

「身に覚えが無い。」

そう答えた。

「悪かったな、怒鳴って・・・。」

カブトはその言葉を、聞いているのか、いないのか、解りにくい様子で立ち上がると、変身を解いた。

そして天道は、無言のまま去って行った。

先ほどから、天道を見張っていた黒装束の女は、こう呟いた。

「使えない奴目。」

第08話：俺様っ！（後書き）

ナ：「天道君、ベルクリケタスワームを倒したね。」
天：「言った筈だ。俺は必ず奴を倒す、と。」

第09話：はめられた天道

その日、天道が夜の町を歩いていると、胸に包丁を刺された男が、フラフラと近寄って来た。

男は力尽き、天道の目の前で倒れた。

「大丈夫かっ？」

天道は倒れた男に声を掛けた。

「こ・・・こ、これを・・・。」

男は天道に一枚の紙切れを渡した。

「何だこれは？」

天道は訊ねるが、男は既に息絶えていた。

「・・・・・・・・。」

男の死に、天道は沈黙した。

翌朝、天道は警視庁の取調室で、尋問を受けていた。

「お前が殺したんだろ？」

担当刑事Aは優しく問う。

だが、天道は一言も喋らない。さっきからずっとこうだ。

すると今度は、その隣にいた刑事Bが、バンツと机を思い切り叩き、

「さっさと答えろ！」

「カツ井だ。尋問と言えば、カツ井だろ。」

天道は刑事Bに言った。

刑事Bは顔を引きつらせ、

「お、お前ふざけてんのかっ？」

と、怒鳴りつける。

「カツ井を出せ。」

「お前なあ！」

「まあまあ、要望に応じて、出してあげましょうよ。」

刑事Aは刑事Bを宥めた。

「仕方が無い！持って来い！」

刑事Bが言っと、刑事Aは取調室を出て行った。

そして数分後、刑事Aがカツ丼を持ってやって来た。

天道は行儀良く両手を合わせ、

「頂きます。」

と、カツ丼を食べ始めた。

——食事中——

天道がカツ丼を平らげると、

「御馳走様でした。」

と、両手を合わせて言った。

「食べ終わった所で、改めて聞くが、お前が殺したんだろ？」

「誰をだ？」

天道の問いに、刑事Bは昨晚の男が写った写真を、取り出して見せた。

天道は溜め息を吐くと、こう言った。

「俺は殺していない。」

俺が会った時は、既に刺されていたんだ。」

「嘘を言うな。現場付近に捨てられていた凶器から、お前の指紋が見付かっている。」

「その凶器を見せてみる。」

刑事Bは、袋詰めにされた凶器を見せた。

「こっ、これはっ？」

驚く天道。

当然の事だ。自分の家にある包丁だからな。

「これがあったからって、俺を犯人にする事は出来ないぞ。」

「目撃者がいても、か？」

「成る程、そう言う事か。」

天道は事件の裏に、ワームが関わっている、と悟った。

「悪いが帰らせて貰う。」

それと、この事件に首を突っ込んではいけない。」

そう言っで、天道は取調室を出ようとした。

しかし刑事Bが、天道の行く手を阻んだ。

「逃げようたつてそうはいかん。」

「^ど逃げ。」

天道は刑事Bを退かした。

が、天道は出て行かなかった。

「お前だな。俺に化けたのは。」

「は？」

「さっき触れた時解った。

俺をはめる為にお前が俺に擬態して写真の男を殺した。」

「何を言ってるんだ？」

刑事Bは、訳解らん、と言う顔で問う。

「お前がワームだと言っているんだ。」

「ほう。」

刑事Bは、緑色のサナギワームに変態した後、直ぐに天道に擬態した。

その傍らで、刑事Aは驚いて固まっていた。

「そうだ。殺したのは俺だ。」

偽天道は犯行を自供。

「だが、俺の正体を知られたからには、お前には死んで貰う。」

「それはこっちの台詞だ。」

天道はカプトゼクターを召喚した。

が、カプトゼクターは、どっちが本物か見分けられず、二人の頭上

をグルグルと飛び回った。

「こつちだ！」

二人の天道は、カブトゼクターに手を伸ばす。

「偽物は引っ込んでいろ。」

偽天道は天道を蹴り倒した。

その隙に、偽天道はゼクターを掴んだ。

「させるか！」

天道はカスクワームに変態し、クロックアップをすると、偽天道が手にしたゼクターを奪い取った。

直後、カスクワームは天道に擬態すると、

「変身！」

ベルトにゼクターをセットした。

「Henshin！」

天道はカブト・マスキドフォームに変身。

「しまった。」

焦る偽天道。

「言え！貴様の目的は何だっ？」

カブトは偽天道に問う。

「お前を牢屋にぶち込んで俺がお前になる。」

偽天道は、緑のサナギワームへと変態し、カブトに襲い掛かった。

第09話：はめられた天道（後書き）

カブト：「これで終わりか？」

ナ：「そうですが何か？」

カブト：「聞いてないぞ。」

ナ：「私に言われましても・・・。

と言う訳で、次回はバトル編。」

カブト：「待てっ、話はまだ！」

第10話：カブト、死す

緑のサナギワームは、カブトに襲い掛かった。

カブトは突然の攻撃を、避ける間も無く、見事に喰らってしまった。カブトは怯んだ。

その隙に、サナギワームは脱皮をし、蠅がモチーフの、ミユスカワームになった。

ミユスカワームは、クロックアップをし、カブトにラッシュを浴びせた。

カブトは押されて行き、壁にぶつかった。

するとミユスカワームは、思い切り体当たりを行った。

壁が破壊され、カブトはそこから外へ、吹っ飛ばされてしまった。更にそこは空中。

カブトは引力により、落下を始めた。

しかしミユスカワームが、カブトを掴み、落ちるのを防いだ、と思うと、今度はそのまま落下した。

それは一瞬の事。カブトは目にも留まらぬ速さで地面に叩き付けられた。

でも、ヒヒロノカネで出来たそのアーマーが、ダメージを吸収。資格者を守った。

カブトは体勢を立て直し、

「キャストオフ。」

ゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーが弾け飛び、カブトホーンが起き上がった。

「Change beetle！」

ライダーフォームに移行したカブトは、「クロックアップ。」

サイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、電子音を鳴らし、クロックアップを発動する。

同時に、落ちてくる瓦礫の速度が、動いているか否かの微妙な速度になった。

カブトはミユスカワームに接近。ラッシュを浴びせ、怯んだ隙にフルスロットルを、

「One!」

体勢を立て直し、接近して来た所を蹴り飛ばし、

「Two!」

そして最後に、

「Three!」

直後、ゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

ゼクターホーンを再び展開。するとライダーパワーが溜まり、ライダーキックが発動する。

「Rider kick!」

電子音と共に、カブトはライダーキックを、ミユスカワームにお見舞い。

「Clock over.」

クロックアップが解除され、同時にミユスカワームは爆裂霧散した。そう思われた。

しかし現実は甘くはない。

ミユスカワームは生きていた。

「貴様如きに殺られてたまるか。」

ミユスカワームはそう言った。

更に、左手中指を立てて挑発もして来た。

これには流石のカブトも、黙ってはられない。

「やり過ぎだぜお前。」

カブトはそれだけ言うと、カブトクナイガンで、ミユスカワームを切り裂いた。

が、タフなミユスカワームは、傷一つ付かなかった。

「うわあああああ！」

カブトは奇声を発し、ミユスカワームに連撃を喰らわせた。しかしミユスカワームは、全くダメージを受けていない。どうなっているのか？

「今のお前に、俺を倒す事は出来ない。」

「そんな馬鹿な事っ？」

カブトは再び、ライダーキックを発動した。無駄だった。

「効いていないっ？」

カブトは思った。

敗ける、と・・・。

ミユスカワームは、呆然と立ち尽くしているカブトに、メガトン級のパンチを浴びせた。

「うおおああ！」

カブトは苦痛の叫び声をあげながら、宙に舞い上がり、地面に落下した。

「そろそろトドメを刺してやろう。」

そう言つて、ミユスカワームは口腔から、毒泡を吐いた。

しかしカブトは、ぎりぎり紙一重の所で、毒泡を避けきった。

「まだ動けるか。」

「俺は、全てのワームを倒すまで、死ぬ訳にはいかない！」

そう言つて、カブトはゆっくり立ち上がった。

「無駄だ。お前はもう動けない。」

ミユスカワームがそう言つと、カブトは脱力して倒れた。

「何故だっ？何故倒れたんだっ？」

「教えてやろう。」

お前が食べたカツ丼には、ハルシオンを混ぜておいたのだよ。」

ハルシオンとは、睡眠薬の事である。

「ほお。」

そこまでして、俺のゼクターが欲しい、と言う事か？」

「解っているなら、早くよこせ。」

ミユスカワームはそう言うが、カブトは承諾しなかった。

「往生際の悪い奴目！無理矢理奪ってやる！」

ミユスカワームは、動けないカブトの向きを変え、ゼクターを外そうとした。

するとそこへ、黒装束の女が現れ、

「何をしている？」

麗奈である。

「お前は！」

ミユスカワームは驚いた様な口調で言った。

「麗奈か。」

俺は今動けない。何とかしろ。」

「『何とかして下さい』だろ？」

まあ良い。助けてやろう。」

そう言つて、麗奈はウカワームに変態した。

「貴様、仲間だろ？何故ライダーを助けるんだっ？」

「此奴は、私の命の恩人だ。」

この間、人間と間違えられて襲われた時、助けて貰ったからな。恩返しせねば。」

そう言つと、ウカワームは大勢の下部しもへを呼び、ミユスカワームをたこ殴りにした。

「麗奈、気を付ける。どんな手を使つか解らんぞ。」

カブトは一応言つてやった。

「問題無い。」

そう言つた矢先、下部達は全滅。ウカワーム一体になってしまった。

「使えぬ奴ら目……。」

ウカワームは、爆発の痕跡を見ると、そう呟いた。

その時、カブトに向かって、ミユスカワームが急降下してきた。

「プットオン。」

カブトは、残りの力を振り絞つて、ゼクターホーンを展開。

「Put on.」

マスクドアーマーが、カブトの胴体を瞬時に覆い、カブトはマスクドフォームに移行した。

それにより、ミユスカワームの攻撃から、カブトは守られた。

「ちっ。」

ミユスカワームは舌打ちをした。

「お前に俺は、倒せない!」

カブトが言うつと、ミユスカワームが忽然と姿を消した。

「何だっ?」

驚くウカワーム。

「何か見えたか?」

「私には何も!」

「俺には、何かを通った様に見えた。」

カブトの言葉と同時に、

「Hyper clock over.」

電子音が鳴ると、何者かが急に現れた。

その何者かは、カブトを少しの間見つめると、一瞬で姿を消した。

一体、何者なんだろうか。

第10話：カフト、死す（後書き）

ナ：「あれは誰？」

天：「考えるな！知らない方が良い秘密もある。」

第11話：壮絶なる戦い

「天道！」

と、加賀美がビストロ・ラ・サルに飛び込んで来た。

かなり慌てている様だが……。

「天道なら、今日は来てないぞ。」

ひよりは、そんな加賀美に、そう言った。

「来てない？」

アイツが来ないなんて、珍しいな。」

加賀美とひよりが、天道の事で盛り上がっていると、黒装束の女が入って来た。間宮 麗奈である。

「お前は……。」

と加賀美。

麗奈は、

「加賀美 新、お前に話がある。」

「話？」

加賀美は警戒しながら問う。

「外へ出る。」

そう言つて、麗奈は、加賀美と一緒に外へ出た。

「話つて何なんだ？」

言つておくが、俺は戦わないぞ。」

「安心しろ、今日は戦いに来たんじゃない。」

「そんな事言つて、俺が油断した隙に、殺ろうと企んでんじゃないのか？」

そう言つた加賀美の右手には、既にガタックゼクターが握られていた。

戦わないと言つたのに、戦うつもりか？

「殺ると言つのか？」

——良いだろう。」

麗奈はそう言うと、ウカワームに変態した。
続いて加賀美も、ベルトにゼクターをセットし、ガタツク・マスクドフォームに変身した。

「うわああああ！」

ガタツクは奇声を発し、ガタツクバルカンでウカワームに撃ち込むが、ウカワームはクロックアップをし、弾丸を避けると、ガタツクを圧倒。

一分もしない内に、ガタツクは敗れ、変身が解けてしまった。
するとウカワームは麗奈の姿になり、その場から去って行ってしまった。

「勝てない相手に戦いを挑むとは、随分と無謀な奴だな。」
突然、何者かの声が聞こえた。

加賀美は、その声のした方を振り向いた。

「天道……。」

呟く加賀美。

それと同時に、

「ソイツから離れる！」

と、後からの叫び声。

その叫び声の主は、天道だった。

天道は走りながら、飛来したゼクターを掴むと、それをベルトにセットし、カプト・マスクドフォームに変身した。

「え？」

訳の解らない加賀美は、どうなってるの？——と言う顔で、目の前の天道と、カプトの事を見る。

カプトはそのまま接近すると、天道をぶん殴った。

「貴様らは今度は何を企んでいる？」

カプトは天道に迫った。

「お前には関係無い。」

天道はそう言うと、緑のサリス（サナギワーム）に変態した。

「ならば力づくで、喋らせてやる。」

カブトはそう言って、サリスにラッシュを掛けた。

が、サリスはカブトのラッシュ攻撃から脱出し、脱皮をしてアキヤリナワームに姿を変えた。

それと同時に、

「うわ！」

と、加賀美が悲鳴をあげる。

その悲鳴にカブトが振り向くと、加賀美がアキヤリナワーム・アンバーに捕まっていた。

「加賀美っ？」

カブトは加賀美を助けようと近付くと、

「動いたらコイツの命は無い。」

と、アンバーが言った。

カブトは咄嗟に足を止めた。

「今だ！」

アンバーが叫ぶと、アキヤリナワームが、クロックアップをし、カブトを制圧。袋の鼠にした。

カブトはキャストオフをしようと、ゼクターに手を掛けるが、アキヤリナワームに邪魔をされ、ゼクターから手が離れてしまった。

その後も、カブトは連撃を喰らい続けた。

そして遂に、カブトは倒れてしまった。

「天道！」

叫ぶ加賀美だが、その声はカブトには届かなかった。

アキヤリナワームは、カブトをつま先で蹴ると、こう言った。

「こいつ、死んだみたいだぜ。」

それに続いてアンバーは、

「用も済んだ。行こうか？」

といい、加賀美を突き飛ばし、アキヤリナワームと共に去って行く。

「天道！」

加賀美は慌てて、カブトに駆け寄る。

するとカブトは、ゆっくり立ち上がった。

「お前っ？」

「身の危険から逃れる為に、仮死状態になる昆虫がいるってな。

死んだ真似も楽じゃない・・・。」

「馬鹿野郎！吃驚させんな！本当に死んじまったかと思ったんだぞ？」

「俺が死んだら、変身は解ける。」

カブトはそう言うと、二体のアキヤリナワームを追った。

天道が歩いていると、曲がり角からカブトが現れた。

「貴様っ？」

天道はアキヤリナワームに変身し、カブトに襲い掛かった。

「キヤストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーをアキヤリナワーム諸共弾き飛ばし、カブトホーンが起きあがる。

「Change beetle！」

カブトはライダーフォームに移行した。

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up。」

と、クロックアップを発動。

——その瞬間、回りの時間の流れが遅くなった。

その証拠に、アーマーによって破壊され、瓦礫となった物が、動いているのかいないのか、僅かな速度で動いている。

カブトはその間に、アキヤリナワームに接近。

軽く攻撃をし、怯ませると、フルスロットルを順番に押す。

「One、two、three！」

カブトはゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

と、カブトは再びゼクターホーンを展開し、

「R i d e r k i c k !」

の音声と共に、アキヤリナワームに回し蹴りを放った。

「C l o c k o v e r .」

その瞬間、アキヤリナワームは緑の血を吹き出し、爆裂霧散。

それと同時に、空中でゆっくり動いていた瓦礫が、時間の流れが戻った為、いつきに落下した。

直後、アンバーがカブトに襲い掛かって来た。

カブトは、背後に迫ったにアンバーに、カブトクナイガン・クナイモードを、グサツと突き刺した。

アンバーは苦痛の叫びをあげながら、爆裂霧散した。

そしてカブトは、右手を上高く挙げた。

その手が、太陽光と重なり、眩しく光る。

第11話：壮絶なる戦い（後書き）

身の危険から逃れる為に・・・
これがやりたかったが為に、こんなストーリーにしてみた。

ミニ劇場

ズ：「ズッバーン！」

ナ：「何ですか？いきなり・・・。」

ズ：「ズッバーン、ズバズッバーン！ズッバーン。」

天：「大剣人ズッバーンは『カブトは強いですね』と言っている。」

ナ：「言葉解るの？」

ズ：「ズッバーン。」

天：「『天道は格好いい』と。」

完

第12話：V3が現れて大変だ（前書き）

たいへん たいへん たいへんど、V3が現れるよ♪

第12話：V3が現れて大変だ

ある男が、ビストロ・ラ・サルに入って来た。
「いらつしやいませ！」

加々美は元気良く出迎えた。

男はその加々美に、

「元気が良いな。」

と、言葉を返した後、珈琲を一杯頼んだ。

「少々お待ち下さい。」

そう言つて、加々美は店の奥へ入って行つた。
それと同時に、

「加賀美いるか？」

と、天道がやつて来た。

加々美はそれに応えて、店の奥から出てきた。

「どうした天道？」

「岬が『早く来い』と言つていたぞ？」

加々美はそう言われ、腕時計を確認した。

「ああああ！」

加々美は叫ぶと、慌ててサルを出て行つた。

天道はそんな彼を見送ると、

「面白い奴だ。」

そう呟いた。

「あの、珈琲は？」

客席の客は、天道に言つた。

「ちよつと待つてろ。」

天道はそう言つと、珈琲を煎れに、奥へ入って行つた。

「俺様特製の珈琲だ。」

そう言つて、天道は珈琲を差し出した。

男は黙って、天道の煎れた珈琲をすする。

「美味い！」

男の口から、思わず本音が出た。

「それは良かった。」

と、天道は言う。

そして数秒の沈黙の後、男が再び口を開いた。

「この珈琲は何処の物だい？」

「『俺様特製』——そう言った筈だ。」

「そうだったね。」

「飲みたければ何時でも来い。最高の物を煎れてやる。」

男は珈琲を飲み干すと、代金を払って、サルを出て行った。

それと入れ替わりに、ひよりが入ってきた。

ひよりは天道を見付けると、

「何でお前がいるんだ？」

と、天道に聞いた。

「加賀美が出て行ったからだ。」

天道はそう言うのと、

「後は任せた。」

そう付けたし、サルを出て行った。

外に出た天道は、さっきの男の後を付けた。

気になる事があるからだ。

「変っ身っ、V3！」

男はそう叫び、V3に変身し、目の前に現れたワームに攻撃を仕掛けた。

久々にV3が現れるとは……。

V3は、ワーム相手に互角に戦っている。

が、ワームはV3の隙を付き、脱皮をしてクレプスワームへと、変

貌を遂げてしまった。

刹那、V3はクレプスワームの姿を見失った。

V3はクレプスワームを捜すが、時既に遅し。

クレプスワームはV3の目の前にいた。

そして次の瞬間、V3の体が宙に舞い上がった。

「よっ、と。」

天道は落ちてきたV3をキャッチ、地面に叩き付けられるのを防いだ。

「ワーム相手に無茶しやがって。」

天道はそう言っていると、V3を放し、接近して来たワームに蹴りを入れた。

蹴られたワームは、怯んでしまった。

V3は天道に、

「奴は強過ぎる。逃げた方が良い！」

そう言った。

が、天道は逃げない。

そんな彼の下に、カブトゼクターが飛来。

天道はそれを掴むと、

「お婆ちゃんが言っていた。」

天道を往く者に、不可能は無い——と。

よく見ておけっ、進化したライダーの力を！」

天道はそう言っで、

「変身！」

と、ベルトにカブトゼクターをセットした。

「HENSHIN！」

天道はカブト・マスキドフォームに変身した。

その直後、カブトはゼクターに手を置き、

「キャストオフ！」

と、ゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

アーマーを弾き飛ばし、カブトホーンを起こすと、

「Change beetle!」

と、ライダーフォームに移行した。

また、弾け飛んだアーマーは、V3をも吹き飛ばした。

その瞬間、クレプスワームが爆発を起こし、消滅した。

V3は何が起きたのか、理解出来ないまま、地面に落下した。タネを明かそう。

それは、V3が吹き飛んだ時の事である。

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up.」

と、クロックアップを発動した。

その瞬間、V3の落下速度が、秒速1センチになった。

又、クレプスワームもカブトに対抗し、クロックアップをした。

カブトはクレプスワームに接近。連撃を繰り出し、クレプスワームを怯ませた。

「One、two、three!」

カブトはゼクターホーンを展開。

「ライダー、キック。」

再度展開し、ライダーキックを発動。

「Rider kick!」

電子音と共に、カブトはクレプスワームに回し蹴りを放った。

「Clock over.」

全ての時間の流れが戻り、クレプスワームが爆発。消滅すると、宙に浮いていたV3が急速に落下し、地面に叩き付けられた。

「何が起こったんだ?」

と、V3。

その問いに対してカブトは、

「アンタが吹っ飛んで、地面に落下するまでの間に倒した。」

「見えなかったぞ？」

「時間を操ったからな。見えなくて当然だ。」
そう言うと、ベルトからゼクターが外れ、何処かへ飛び去って行った。

それと共に、カブトの変身が解けた。

その天道に釣られ、V3も変身を解いた。

「俺は風見 志郎。」

そう言って、志郎は天道に手を差し出した。

が、天道は握手などせず、

「俺は、天道 総司——天の道を往き、総てを司る男だ。」

と、手をポケットに入れて名乗った。

志郎は、何だコイツ？——とでも言う様な顔で、手を下ろした。
その後、天道は志郎を残し、去って行った。

第12話：V3が現れて大変だ（後書き）

V3を出してみました。

てか、これからも歴代ライダー出しますんで宜しく。

第13話：封印されるカブト

その日、矢車 想は都内を彷徨っていた。
行く宛など無い。ただ、ひたすら彷徨い続ける。

そしてその矢車の前に、一人の黒装束の女・間宮 麗奈が現れた。

「お前が矢車 想だな？」

麗奈の問いに、矢車は足を止め、問い返す。

「何故俺の名を？」

「そんな事はどうでも良い。

お前のゼクターを渡せ。」

麗奈はそう言い、ウカワームに変態する。

「貴様、この間の！」

矢車は構えると、ザビーゼクターを召喚。

飛来したザビーゼクターは、矢車の左腕に装着されているザビーブレスに、自動的にセットされた。

「変身！」

矢車はザビーゼクターをカチッと回す。

「Henshin！」

音声と共に、矢車はザビー・マスコドフォームに変身。

直後、ザビーはゼクターウイングを展開。

「キャストオフ！」

バインドリングに指を引っ掛け、ザビーゼクターを180度展開。

「Cast off！」

アーマーが吹き飛び、

「Change wasp！」

と、ライダーフォームに移行。

「無駄な事を・・・。」

ウカワームはそう呟くと、クロックアップを発動し、ザビーに接近した。

同時に、ザビーもクロックアップを発動し、応戦する。

が、ウカワームはとても強く、ザビーでは歯が立たなかった。

「Clock over.」

と共に、ザビーは地面を転がる。

「そろそろトドメを刺してやろう。」

ウカワームはそう言っ、ザビーに一步步つゆっくり近付いて行く。

「麗奈、やめておけ。」

突然、ウカワームの背後から男の声が聞こえた。

その声の主は、カスクワームに変態した天道だった。

ウカワームは足を止め、後を振り向いた。

「何故止める？」

と、ウカワーム。

「こんな雑魚、やるだけ無駄だ。」

（カブト？ いや、ワームか？）

ザビーはそう思いつつ、気付かれぬ様に、そっと立ち上がった。

が、カスクワームがそれに気付いた。

「ライダーステイング！」

ザビーはフルスロットルを押し、

「Rider sth ing！」

と、ライダーステイングを発動し、カスクワームにゼクターニードルをぶつけた。

カスクワームは避ける間も無く、ライダーステイングをまともに喰らうと、数メートルほど吹っ飛んでしまった。

そしてそのまま、地面に落下すると、天道に戻った。

「貴様っ、ワームだったのかっ？」

と、驚きながら問うザビー。

天道は立ち上がり、

「ワームだと問題あるのか？」

と、問い返す。

「ワームは人類の敵だ！一匹残らず倒す！」

そう言つてザビーは、天道に接近する。

生身の天道は、迫り来るザビーをかわし、カブトゼクターを召喚。天道はゼクターを掴み、ベルトにセットし、カブト・マスクドフォームに変身する。

「たつた今、貴様はZECTを敵に回した！」

ザビーは怒鳴り散らすと、ライダーステイキングを発動し、カブトにそれを浴びせた。

カブトは再び、数メートル程吹っ飛んだ。

そして地面に叩き付けられると、変身が解けた。

「ぐはっ！」

天道は緑色の血を口から吐いた。

「例え完全に擬態していても、血までは変わらないみたいだな。」と、ザビーは呟いた。

「大丈夫か？」

ウカワームは天道の安否を確認する。

が、時既に遅し。天道は気を失っていた。

「ベルトの力も貰う。」

ザビーはそう言つて、天道のベルトをグーで叩き、破壊した。

「命だけは助けてやる。感謝しろ。」

そう言つて、ザビーはゼクトロンに乗り、そこから去って行った。

数分後、天道は目を開けた。

その目に、麗奈の姿が映る。

「誰だお前？」

天道の言葉に、麗奈は驚愕する。

「お前、私を忘れたのか？」

「何も思い出せない……。」

俺は、一体？」

（記憶喪失か……こいつは使える。）

麗奈は何か思いつくと、

「自分の名前は言えるか？」

その問いに天道は、

「日下部 総司。」

と、答える。

日下部 総司——天道の本名だ。
くさかへ そつじ

「日下部 総司——先ずお前は、人間では無い。ワームだ。」

「知っている。」

「そうか・・・なら、お前の目的は何だ？」

「思い出せない。」

「この星を征服する事だ。」

天道は立ち上がると、

「面白い。」

やってやろう。」

と、言い放った。

麗奈はその天道を見ると、ニヤリとほくそ笑んだ。

第13話：封印されるカフト（後書き）

な、何が起きた？天道の身に何が起きたっ？

第14話：カフトベルト

突如、天道に廃墟へ呼び出された加賀美は、

「天道、話って何だ？」

と、天道に歩み寄りながら問う。

天道は加賀美に手を差し出し、

「ガタツクゼクターをよこせ。」

「はあ？」

何でお前にゼクターを渡さなくちゃいけないんだ？」

加賀美は訳の解らない顔で問う。

「嫌だ、とても言うのか？」

「当然だろ？」

ゼクターを手放したら、俺は変身出来なくなる。」

「そうか・・・なら、力づくで、奪う・・・。」

そう言うのと、天道はカスクワームに変態し、加賀美に殴り掛かる。

加賀美は素早く避けると、

「お前っ、ワームだったのかっ？」

「それがどうした？」

（上級ワームっ？）

そう思いながら、加賀美はゼクターを召喚し、ガタツク・マスクド
フォームに変身した。

「お前っ、天道はっ、本物の天道はどうした！」

と、カスクワームに怒鳴りつけるガタツク。

カスクワームは天道の幻体を現して、

「天道と言うのは、コイツの事か？」

と、ガタツクに聞いた。

「そうだ！」

怒鳴るガタツクに、カスクワームはフツと鼻を鳴らし、

「殺したよ。7年前にな。」

と、言つてやった。

「騙したのか。」

「何の事だ？」

「惚^{とほ}けるな！」

この間、ワームを倒しただろっ？」

「それはどう言う事だ？」

カスクワームは天道の記憶を探る・・・が、それらしき記憶は見付からない。

「記憶に無いな。」

カスクワームはそう言つと、クロックアップを発動。

刹那、ガタツクはカスクワームの姿を見失つた。

「何処へ行つたっ？」

ガタツクが独り言の様に叫ぶと、ガタツクの体が一瞬にして宙に舞つた。

直後、カスクワームの姿が一瞬現れたかと思うと、直ぐに消えた。

同時に、ガタツクの体が、急に横へ飛んだ。

カスクワームが吹っ飛ばしたのだ。

そしてガタツクは、地面に落下。叩き付けられてしまった。

それを見届けたカスクワームは、クロックアップを解き、ガタツクの前に姿を現した。

「ゼクターをよこせ。」

と、カスクワームはガタツクに手を差し出す。

「誰がお前なんかに！」

ガタツクは立ち上がると、キャストオフをし、ライダーフォームに移行した。

「クロックアップ！」

ガタツクはサイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、クロックアップを発動し、カスクワームに体当たり！

カスクワームは、避ける間もなく、ガタツクに吹き飛ばされ、宙に

舞った。

カスクワームは空中で天道に戻り、ベルトが腰から外れ、本人は落下してゴロゴロと転がる。

ガタンツと、ベルトは音を立て、ガタツクの前に落ちた。ガタツクはそれを拾う。

「ベルトを直してくれ！」

突然、ガタツクの頭に謎の音が響いた。

その声は、天道の声に似ていない事も無い。

ガタツクはベルトを持ったまま、戦闘から離脱した。

ガタツクが去って数分。

天道は漸く、目を覚ました。

第15話：直るベルト

「田所さん——これ。」

そう言つて、加賀美は天道が付けていたベルトを渡した。

「これは、カブトのベルトじゃないか。どうしたんだ？」

「修理をお願いしたいんです。」

「解つた、手配しておこう。」

そう言つて、田所はベルトを受け取つた。

その瞬間、ベルトにタキオン粒子がビリツと流れた。

田所は驚いて、ベルトを落としてしまった。

「驚いた。」

こんな事つて・・・。」

そう言つて、田所はベルトを拾つて改める。

「こつ、これはっ？」

「どうかしたんですか？」

「このベルトは、ZECTが作つたものではない。」

田所はそう言つた。

「兎に角、本部に送つてみよう。」

「無様だな。」

そう言つて、麗奈は天道の下へやって来た。

天道は麗奈を見上げる。

「すまない。」

そう言つて、天道は起き上がと、

「ゼクターを奪えなかった。」

麗奈はそんな天道を、

「気にするな。」

と、慰める。

「どうやら、おでましの様だな。」

そう言つて、天道はカスクワームに変態。続いて、麗奈もウカワームに変態。

「お前達は、俺が倒す。」

そう言つたのは、二人の前に現れた、一人の男だった。

「変身、V3！」

と、男はV3に変身した。

「ほお、V3か。」

カスクワームはそう言つと、ウカワームと共にクロックアップを発動。V3に接近する。

しかしV3は、クロックアップ・・・いや、1秒間に足を10回動かし、二体の攻撃を避けた。

「クロックアップか？」

「違う、ただ足を早く動かしたただけだ。

しかし・・・——クロックアップに対抗出来るとは。

油断するなよ？」

「俺を侮るな。」

そう言つて、V3に歩み寄るカスクワーム。するとV3が殴り掛かる。

「足だけ早くなつても無駄だ！」

カスクワームはひらりと攻撃をかわし、地面に叩き付けた。

「うわっ！」

「もう終りか。」

そう言つて、V3を踏み付けるカスクワーム。

「そこまでだ！」

突然、ガタックが襲い掛かつて来た。

カスクワームは避ける間も無く、攻撃を喰らってしまった。

「うわああああ！」

と、叫びながら吹っ飛ぶカスクワーム。

「お前を封印する！」

そう言つて、ガタックはカスクワームにベルトを投げた。

ベルトは寸分のずれ無く、カスクワームの腰にはまった。
直後、カスクワームは落下し、天道に戻る。

「うわああああ！」

天道は頭を抱えてあえいだ。

「お、俺が俺じゃなくなる！」

天道は叫び続ける。

「うわああああ！」

やがて、天道は落ち着きを取り戻し、静かになった。

「天道っ？」

ガタツクは天道に駆け寄る。

「天道！」

ガタツクの呼び掛けに、天道はゆっくり目を開ける。

「か、加賀美・・・——感謝する。」

そのやりとりを見ていたウカワームは、

「使えん奴目。」

と、吐き捨てて去って行った。

第16話：さらばザビー

ブオーンツと、バイクの走る音と共に、一台のバイク<マシンゼクトロン>がやって来る。

それに乗っているのは、矢車 想。

矢車はマシンを止めると、バイクから降りた。

（みんな・・・。）

矢車は、ワームにやられ、倒れた部下達を眺めた。

「た、隊長・・・。」

そう言ったのは、ボロボロになり、やっこの思いで立っている影山瞬しゅんだった。

「影山、ワームは？」

「逃げられました。」

「そうか。」

取り敢えず、動けない者を優先に運ぼう。」

そう言って、矢車は動けない隊員達を運ぶ。

するとそこへ、緑色のサナギワーム・サリスが数十体ほど現れた。

そいつらは、瞬く間に矢車達を包囲。

「影山——道を作るから逃げろ。」

そう言って、矢車は飛来したゼクターを掴み、「変身！」

と、ゼクターをザビーブレスにセットした。

「Henshin！」

ザビーブレスを起点に、矢車をマスクドフォームが瞬時に包み込み、

矢車はザビー・マスクドフォームに変身した。

「キャストオフ！」

ザビーはゼクターウィングを起こし、ゼクターを展開し、

「Cast off！」

と、アーマーを吹き飛ばし、ワームを撃破。

「Change wasp！」

と、ライダーフォームに移行。

「今なら行けるぞ!」

そう言つて、影山を逃がすザビー。

だが、影山の前に、セクティオフォームが現れ、行く手を阻んだ。

それに気付いたザビーは、影山の下に駆けつけようとするが、セクティオフォーム・アクエレが彼の前に立ちはだかった。

その時、どこからか、カブトゼクター飛来し、セクティオフォーム・アクエレを攻撃し、ある人物がいる方向へ飛んで往く。

そのある人物が、天道 総司だと言ふ事は、言つまでも無い。

天道はゼクターをガシツと掴むと、

「変身!」

そう言つて、それをベルトにセットした。

「Henshin!」

音声と共に、天道はカブト・マスクドフォームに変身。

「そんな馬鹿なっ?」

と、ザビーが驚く。

それもそうである。

カブトは以前、ザビーによつて、ベルトを破壊されたのだから。しかし、カブトは今、ザビーの目の前に立っている。

ザビーにとつて、これが現実なのか否かは、定かでは無い。

「カブトオオオオ!」

ザビーはそう叫び、カブトに襲い掛かった。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

アーマー諸共、接近するザビーを吹き飛ばし、カブトホーンを起こしてライダーフォームに移行する。

「Change beetle!」

それによつて吹き飛んだザビーは、影山の前に立つセクティオフォームにぶつかる。

カブトは狙ってやったのか？

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、クロックアップを発動し、サリス共に攻撃する。

「Clock over。」

クロックアップが解けると、サリス共は一斉に爆発。跡形もなく消え去った。

「許さん！」

ザビーはカブトに接近し、思い切り殴りつけた。

その衝撃で、カブトは後退。

「ライダーステイング！」

そう言つて、ザビーはフルスロットルを押す。

「Rider sthing！」

と、ライダーステイングが発動。

「これで終わりだ！」

ザビーはカブトに飛び掛かった。

「隊長！」

と、セクティオワームに捕まった影山が叫ぶ。

しかしその声は、カブトに執着するザビーには、届いていなかった。

「ゲームオーバーだ。」

カブトがそう言つと、ザビーセクターが飛び去り、ザビーの変身が解けてしまった。

「お前は天の道を外れた。」

カブトはそう言つて、矢車を避けると、セクティオワームにカブトクナイガンを投げた。

グサッ！

カブトクナイガンがセクティオワームに突き刺さる。

カブトはクロックアップをし、セクティオワームが爆発する寸前に、影山を救出した。

直後、セクティオワームは爆裂霧散した。

その爆風で、カブトクナイガンが飛んでくる。

カブトはそれをキャッチし、アクエレに接近。カブトクナイガンで切り付ける。

「トドメだ！」

そう言つて、アクエレにカブトクナイガン突き刺した。

その瞬間、アクエレは粉々に散った。

「Clock over。」

クロックアップが解けると、カブトは去って行った。

第17話：カフトVSサソード

——ZECT本部——

三島がニヤつきながら、四角いシルバーのジュミラルミンケースを見つめていた。

三島はそれを開けると、中に納められた、かぶとむし甲虫をモチーフにした、ゼクターを手にした。

が、背後に何者かの気配を感じると、咄嗟にそれをしまつて隠した。

「それがハイパーゼクターか。」

そう言ったのは、黒装束の女、間宮 麗奈だ。

三島は振り向き様に、

「貴様っ、どうやってっ？」

と、驚いた。

「クロックアップすれば誰にも見られまい。」

「反則だ。」

「私の辞書にそんなものは無い。」

兎に角……——それをこっちに渡してはくれぬか？

そうすれば、命だけは助けてやろう。」

——ビストロ・ラ・サル——

いつもの様に、天道は食後のコーヒーを味わっていた。

「ひよりっ、サバ味噌追加だ！」

急にまかないが食べたくなった天道は、ひよりにそう言った。

しかしひよりは、こう言った。

「鯖が無い。」

「だったら早く取り寄せてくれ。」

「ボクに言っな。」

それに、取り寄せは全て弓子さんがやってるんだ。」

「じゃあ鯖を仕入れる様に言ってくれ。」

そう言つて、天道は店を出て行つた。

「金払つてけ！」

そう言うひよりの言葉を無視して。

その日の夜、天道は自宅に向かつて歩いていった。

そんな彼の下に、カブトゼクターが飛来した。

「天道様、ワームです。」

高いトーンでそう言つたのは、カブトゼクターだ。

何故、ゼクターが喋るのか？

それは、天道が改造したからである。

「場所は？」

その問いに、

「真後ろです。」

と、ゼクターが答える。

天道はゆっくり、後ろを振り返つた。

天道は目の前のサリスに、

「ほお、お前か。」

と、言つた。

サリスはワームの言葉で、こう言つた。

「助けて下さい。」

その言葉に天道は、

「何があつた？」

と、聞き返す。

「麗奈さんが、サソードに……。」「

そう言つて、サリスは爆発した。

（麗奈がっ？

サソードって？）

そう思いつつ、天道は走り出した。

（一体、何があつたと言うのだ。）

——とある雑木林——

ウカワームは、マスクドフォームのサソード相手に、苦戦していた。

「強いっ？」

「神に代わって剣を振るう男に、勝てる者はいない！」

そう言つて、サソードヤイバーを降り下ろすサソード。

「何故ライダーが、こんなにも強いっ？」

その問いに、

「それはお前が弱いだけだ。」

そう答える者が一人。

その人物が、カブトである事は、言うまでも無い。

「お婆ちゃんが言っていた。

戦いはヘソでするものだってな。

生半可な態度では、ライダーには勝てないぞ。」

そう言つて、カブトクナイガンから、サソードに向けて、光弾を発

射するカブト。

が、サソードは素早く光弾を避けた。

「貴様っ、どう言つつもりだっ？」

「麗奈に手を出す奴は、相手が誰であろうと、俺と言う太陽が許さない。」

そう言つて、クナイガンを持ち変えると、サソードに飛び掛かった。
カーンッ！

と、サソードの装甲に触れたクナイガンが、鋭い金属音を立てた。

「うわああああ！」

カブトは奇声を発し、サソードをおもいつき殴り付けた。

それにより、サソードは吹っ飛び、地面に叩き付けられた。

立ち上がったサソードは、

「キャストオフ！」

と、ゼクターニードルを押し込んだ。

「Cast off！」

アーマーが吹き飛び、ライダーフォームに移行。

「Change scorpion!」

同時にカブトは、無数のアーマー攻撃を喰らってしまった。

「クロックアップ。」

そう言つてサソードは、トレーススイッチに触れた。

「Clock up!」

クロックアップしたサソードは、カブトに接近した。

刹那、カブトは宙に舞った。

直後、再びサソードの攻撃が飛ぶ。

「うわ!」

カブトは手摺を越え、バシヤンツと音を立て、水の中に落ちた。

「Clock over!」

「カブトツ?」

手摺に越しに、水の底を覗くウカワーム。

しかし水は、街灯などの影響で、反射してしていて、底が見えなかった。

「次はお前だ。」

サソードはそう言つて、一歩ずつウカワームに迫る。

勝気の無いウカワームは、後退りを始めた。

「逃げるなよ。」

そう言つて、サソードは駆け出し、ヤイバーを降り下ろした。

その瞬間、カブトの腕が、サソードヤイバーを受け止める。

「麗奈には指一本触れさせない。」

そう言つて、サソードを押し返すカブト。

「えーいつ、俺の邪魔をするな!」

と、今度はサソードが、カブトを押し返す。

「ならば俺を倒してからにしろ。」

「良いだろう。」

そう言つて、サソードはフルスロットルを押す。

「ライダー Slash!」

「Rider slash!」

ライダーズラッシュを発動したサソードは、それをカブトに叩き込む。

が、カブトにその攻撃は、全く効いていなかった。

「最強の技を叩き込んだと言っのに、何故効いていないんだっ？」

焦ったサソードは、自暴自棄になって、カブトに攻撃をしまくった。

（いい加減ハツタリも、正直キツくなって来た。）

そう思いながらも、必死で堪えるカブト。

そんなカブトに、ウカワームはこう聞いた。

「何故反撃しない？」

その問いに、カブトはこう言う。

「これはお前の戦いだ、どうする？」

「殺れ。」

ウカワームそう言った。

カブトはそれに応えて、

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーが弾け飛び、カブトホーンが起き上がり、青いコンパウン

ドアイがピカツと光り、

「Change beetle！」

と、ライダーフォームに移行した。

それと同時に、サソードは無数のアーマーで吹き飛んだ。

「やり過ぎだぜお前。」

カブトはそう呟き、クロックアップを発動。

カブトはサソードに接近し、ラッシュ攻撃を始めた。

「俺がこうなったら、もう誰にも止められない！」

そう言っつて、サソードを殴りまくるカブト。

「One！」

と、カブトはフルスロットルを押し、サソードを殴る。

「Two！」

再び押し、今度は膝蹴りをするカブト。

「Three!」

最後のボタンを押し、ゼクターホーンを展開。

「トドメだ。」

ライダーキック。」

と、ゼクターホーンを元に戻す。

「Rider kick!」

それが発動すると、カブトは回し蹴りを放った。

ライダーキックを喰らったサソードは、空中に舞い、変身が解けてしまった。

「Clock over.」

クロックオーバーしたカブトは、生身の神代を上から叩き付けた。叩き付けられた神代は、ワーム独特の緑の血を口から吐いた。

勿論、カブトはそれを見逃さなかった。

「お前……。」

カブトはそう呟くと、変身を解いた。

「何故トドメを刺さない?」

ウカワームの問いに、天道はこう言った。

「殺す価値も無い。」

「何故だ?」

「こいつも、俺と同じだからだ。」

第18話：カフトVSガタック

その日、加賀美が歩いていると、

「カ・ガーミ！」

剣が彼の前に現れた。

剣はフラフラになりながら、加賀美の前まで来ると、そこで倒れてしまった。

「剣っ？」

加賀美は剣に問い掛ける。

「俺は・・・。」

それだけ言つと、剣は気を失ってしまった。

加賀美は剣を負ぶつて、名門ディスカビル家へと向かった。

ビストロ・ラ・サルでは、天道がいつもの様に席に座り、ひよりの作つたサバ味噌を食していた。

その向かいには麗奈が座り、蟹の海鮮を食べている・・・共食い。

こいつは、仲間を喰つても、何も感じないのか？

「どうした？——さつきからひよりを見詰めている様だが・・・。」

天道はひよりを見詰めている麗奈に訊ねた。

その天道の言葉を聞いたのか、ひよりはこう言った。

「ボクの顔に何か付いているのか？」

「何でも無い。」

「その通りだ、何でも無い。」

二人の言葉に、ひよりは首を傾げながら、奥へと入って行った。

「天道いるかっ？」

そう言つて飛び込んで来たのは、熱血漢漂わせる加賀美だった。

加賀美は天道を見付けると、

「ちよつと来い！」

と、天道を誘う。

「食事中だ、少し待ってくれ。」

天道はそう言って、動こうとしなかった。

「良いから来い！」

加賀美はそう言って、天道を無理矢理連れて行く。

「ひよりっ、これは昨日までのツケと今日の代金だ！」

そう言って、天道はお金の入った封筒を投げた。

その封筒は、カウンターの上に、しっかり乗った。

加賀美は天道を連れ、人気のない所にやって来た。

「俺に何の用だ？」

「剣から聞いたぞ。」

お前、剣に何をした？」

その問いに、天道はこう言った。

「お前に言う筋合いは無い。」

「何？」

お前、自分が何をしたか解ってるのかっ？

俺の親友を、剣を傷付けたんだぞ！」

そう言って、天道の胸倉むなぐらを掴む加賀美。

「天道っ——俺と勝負しろ！」

加賀美はそう言って、挑戦状を叩き付けたが、

「断る。」

と、あっさり断られてしまった。そう思われた。

「だが、もし俺とやるのなら、剣を殺せ。」

「何っ？」

「これはお前の為だ。そして、お前のその親友の為でもある。

奴は……——奴の正体は……。」

（いや、これは黙っておこう。）

「剣の正体がどうしたっ？」

「聞かなかった事にしてくれ。」

「出来るか！」

加賀美は胸倉を放すと、天道の顔面を強く殴り、ガタックゼクターを召喚した。

「落ち着け加賀美！」

お婆ちゃんが言っていた。

男はクールであるべき・・・沸騰するお湯は蒸発するだけだったな。

「

しかし加賀美には、天道の言葉など聞こえていなかった。

「変身！」

加賀美はガタックゼクターをベルトにセット。

「Henshin！」

と、ガタック・マスクドフォームに変身した。

「やれやれ・・・。」

天道はそう呟き、カプトゼクターを召喚し、カプト・マスクドフォームに変身した。

「うわああああ！」

ガタックは奇声をあげ、ガタックバルカンを連射。

カプトはその無数の弾丸を、マト。ツクスの如く体を後に反らせて回避。

直後、カプトクナイガンを発砲。

クナイガンから発射した一発の光弾が、ガタックバルカンの動きを封じる。

するとガタックは、

「キャストオフ！」

と、ゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーを弾き飛ばし、ガタックホーンを起こし、赤いコパウンドアイが光り、

「Change stag beetle！」

と、ライダーフォームに移行した。

「クロックアップ！」

ガタツクはサイドバックルを叩き、

「Clock up」

と、それを発動。

ガタツクはカブトに接近すると、ダブルカリバーを振り下ろした。が、カブトはそれを握って止めた。

「馬鹿なっ？」

クロックアップはライダーフォームでなきゃ見えない筈！」

「俺はフォームだ。」

カブトはそう言って、ガタツクを上蹴り上げた後、自分も飛び上がり、ガタツクを上から叩き付けた。

「うわ！」

ガタツクは地面に叩き付けられ、変身が解けてしまった。

「お前の動きは単純過ぎる・・・——もう少し考えてから行動しろ。」

カブトはそう言って、去って行った。

第19話：二人の絆・・・ドレイク誕生

都内にあるメイク屋。

そこに一人の男性、風間 大介と一人の少女、小百合——通称、ゴンはいる。

「ねえ、大介。

今日もお客さん、来ないね!。」

椅子に座って、ふて腐れながら言ったのは、ゴンである。

そんなゴンに、大介はこう言う。

「大丈夫、きつと来る。

世界中の女性がこの俺を求めて!。」

その言葉に、

「また始まったよ・・・。」

と、呟くゴン。

しかしその言葉は、大介には届いていない。

そんないつものやりとりをしていると、空色のトンボが一匹、風間の前にやって来る。

「可愛い!。」

とゴン。

そのトンボは、ゴンの一言に嬉しくなったのか、ゴンの回りを飛び回った。

「それにしてもこのトンボ・・・——一体、何処から?。」

大介はそう言って、トンボを見つめた。

するとそれは、一瞬に消え去った。

「はっ!。」

と驚くゴン。

そんなゴンに、大介は、

「そろそろ出掛けるよ。」

の一言。

「うん！」

ゴンは頷くと、大介と手を繋ぎ、メイク屋を出て行った。

二人は外に出ると、数人の人達に囲まれた。

「ちよつと来て貰おう。」

そう言つて、そいつらは、二人を抱えて連れて行く。

「降ろせ！」

大介は怒鳴つたが、どうなるという事でも無い。

「私達は行かなきゃいけない所があるの！」

お願いだから降ろして！」

ゴンはそう言つが、奴らの耳には届いていない。

「ドレイクゼクターは奴を選んだ。」

ZECT本部の一室で、三島はそう言つた。

更に三島は、

「奴に取られる前に擬態しろ！」

と、シロアリに似た、フォルミカルビュスワームに言つた。

「お任せ下さい。」

フォルミカルビュスワームはお辞儀をすると、クロックアップをし、その場から消え去つた。

風間達は、とある廃工場に連れて来られた。

「連れて来たか。」

そう言つて、奥から現れたのは、風間の姿をした男だった。

こいつは恐らく、風間に擬態した、フォルミカルビュスワームだろう。

「お前達、その餓鬼を連れて行け。」

「了解しました。」

奴らはそう言つて、ゴンを何処かへ連れて行く。

「待てっ、ゴンを放せ！」

風間はそう言うが、奴らは聞かない。

「安心しろ。」

ゴンには何もしない。」

そう言ったのは、もう一人の風間だ。

「お前、何者なんだ？」

「俺か？」

そう言うて、もう一人の風間は、フォルミカルビュスワームに変態した。

「ばっ、化け物！」

風間がそう言った瞬間、彼曰く、化け物に向かって、一発の光弾が飛んで来た。

その光弾は、フォルミカルビュスワームにヒットし、そいつを怯ませた。

「お婆ちゃんが言っていた。

子供は宝物・・・この世で最も罪深いのは、その宝物を傷付ける者だってな！

助けてやるから、早くあの子の所へ行け！」

そう言ったのが、カブト・マスクドフォームである事は、最早言うまでも無い。

「ありがとうございます！」

風間は例を言うと、ゴンを助けに、奴らの後を追った。

「俺の邪魔をしやがって！」

フォルミカルビュスワームはそう言うて、クロックアップを発動し、カブトに接近した。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

フォルミカルビュスワーム諸共、もろともアーマーを吹き飛ばすと、カブトホーンを起こし、ライダーフォームに移行。

「Change beetle！」

「ゴンを返せ！」

風間は奴らに怒鳴り付けた。

すると奴ら、全員サリスに変態し、風間に襲い掛かった。

そこへウカワームが現れ、風間を庇った。

「此処は私がなんとかする・・・——お前はあの子を連れて早く逃げろ。」

ウカワームはそう言って、サリス共を粉砕。

しかしそこへ、フォルミカルビュスワームのマキシラとオキュルスが現れた。

「お前は我々を裏切った。」

「殺す！」

そう言つて、マキシラとオキュルスは、クロックアップをして接近。ウカワームを挟み打ちにし、ボカスカとタコ殴りにした。

「うわああああ！」

と、悲鳴をあげるウカワーム。

流石の彼女も、二体相手では、手も足も出ない様だ。

「ゴン。」

風間がゴンを抱え、その場を離れようと、去ろうとした時、彼の下に、ドレイクグリップと合体したゼクターが飛来した。

「こいつは・・・。」

そう呟き、風間はそれを掴んだ。

「Henshin！」

突如、ゼクターから電子音が鳴り、風間はドレイク・マスクドフォームに変身した。

「大介っ？」

驚くゴンと、

「これは・・・。」

と、呟くドレイク。

「One two three!」

と、フルスロットルを押したカブトは、ゼクターホーンを展開した後、

「ライダーキック。」

と、再び展開した。

「Rider kick!」

それを発動したカブトは、フォルミカルビュスワームに回し蹴りを繰り出した。

「Clock over。」

いつもの様にクロックオーバーすると、フォルミカルビュスワームは爆裂霧散した。

ドレイクに変身した風間は、ゴンを降ろし、マキシラに光弾を発射した。

その光弾はマキシラにヒットし、奴を怯ませた。

それに対して、怒ったマキシラは、クロックアップで、ドレイクに接近する。

「うわ!」

ドレイクは迫り来るマキシラに、吹き飛ばされてしまった。

「大介!」

と、ドレイクに駆け寄るゴン。

しかしマキシラが、ゴンの前に立ちはだかる。

怯えるゴンをヨソに、ゴンに擬態するマキシラ。

「私の真似しないで!」

と、 gon は gon マキシラに迫った。

そして何時しか、どちらが本物か、判らなくなってしまった。

ドレイクは動揺して、どっちを撃てば良いのか分からなくなった。

「大介っ、私が本物よ!」

二人のゴンが、同じ事を言った。

「お婆ちゃんが言っていた。」

絆とは決して断ち切る事の出来ない深い繋がり！
例え離れていても心と心が繋がっているってな！
ドレイクっ、自分を信じろっ、それが本物だ！」

そう言ったのは、カプトだ。

ドレイク冷静に考えた。

（さっき、ゴンはいつの向こうにいた。

そして、二人の位置が入れ替わって・・・。

そうかつ、あっちが偽物！）

ドレイクは、銃を右側にいるゴンに向けた。

「大介っ、私は本物よ！」

と、焦って叫ぶゴン。

「お前はっ、ゴンじゃない！」

そう言っつて、ドレイクは光弾を発射した。

放たれたその光弾は、ゴンにヒット。

「ど・う・し・て？」

ゴンはそう呟くと、マキシラに変態し、爆裂霧散した。

同時に、本物の姿が消えた。

「ゴンッ？」

「安心しろっ、この子は無事だ！」

いつの間にか、ドレイクの後ろにいたカプトが、ゴンを抱えながら
そう言った。

実は、爆発と同時に、カプトがクロックアップをし、巻き込まれぬ
様、ゴンを救出していたのだ。

「ゴン！」

ドレイクは振り向いて、カプトから放れ、走ってきたゴンを抱き抱
えた。

「大介！」

と、ゴンも叫ぶ。

すると、ウカワームを気絶させたオキュルスが、ゴンとドレイクを
吹き飛ばした。

ドレイクはゴンの下敷になり、地面に落下。

「大介っ？」

心配するゴンに、

「俺は大丈夫だ。」

と、ドレイクは言った。

ドレイクは立ち上がり、ゴンを降ろすと、

「少し離れている。」

そう言って、ゴンを自分から離れさせた。

「キャストオフ！」

ドレイクはヒッチスロットルを引き、ドレイクグリップのトリガー

(引金)を引く。

「Cast off！」

アーマーが吹き飛び、トンボをモチーフにしたライダーフォームに移行。

「Change dragonfly！」

その容姿にゴンは、

「格好良い……。」

と、目をハートにして呟いた。

「クロックアップ！」

ドレイクはトレーススイッチに触れ、

「Clock up！」

それを発動。

ゴンの目の前を、オキュルスと共に、高速で動き回る。

その光景は、ゴンにはしっかりと見えていた。

それに気付いたカブト。

「お前、あれが見えるのか？」

と、訊ねる。

「見えるよ。」

ゴンはそう言った。

(こいつ、ワーム?)

と、疑問に思うカブト。

「そろそろ終いだ。」

ドレイクはそう言って、ドレイクウィングを閉じ、それを手前に倒すと、ヒッチスロットルを引く。

「ライダーシューティング。」

ドレイクはトリガー引いた。

「Rider shooting!」

銃口からタキオン粒子の光弾が放たれ、オキユルスに直撃する。

「Clock over。」

その音声の後、オキユルスは爆裂霧散した。

見事ワームを消したドレイクは、ゴンの方を振り向くと、変身を解いた。

直後、ドレイクゼクターが飛び去って行った。

「大介!」

ゴンは風間に駆け寄る。

風間はゴンを抱き抱え、

「ゴン……。」

と、呟いた。

その様子を見つめるカブトは、

（あいつ、自覚が無いのか?）

と、心の中で呟きながら、変身を解いた。

第19話：二人の絆・・・ドレイク誕生（後書き）

ナ：「天道君、ゴンちゃんは、ワームなんですか？」

天：「随分唐突な質問だな。

まあ、それは、後の展開を楽しみにしていてくれ。

お婆ちゃんが・・・。」

作者により強制終了。

第20話：ゴン変身！ダムソルとダムソルスワーム（前書き）

今回はゴンが変身します。

第20話：ゴン変身！ダムゾルとダムゾルスワーム

潮風公園の噴水広場。

ゴンは一人で、そこにいた。

誰かと待ち合わせをしている様だ。

（大介、遅いなあ・・・。）

何時まで経っても現れない風間に、ゴンは腹が立ち始めていた。

そんなゴンの前に、小さなトンボ、イトトンボ——別名、とうしみとんぼが飛んで来た。

そいつはゴンの肩に止まると、羽を休めた。

そう言えばこのトンボ、ドレイクゼクターに何処か似ているのは気のせいだろうか？

「君は、何処から来たの？」

と、そのトンボに訊ねるゴン。

トンボに聞いた所で、答えてくれる筈など無い。

それでも、ゴンは訊ねたのだ。

するとイトトンボ、何処かへと飛び去って行った。

ZECTの一室で三島は、

「ダムゾルゼクターはドレイクと一緒に餓鬼を選んだ様だ。」
と、コレオプテラワーム・アージエンタムに言った。

「あの餓鬼と入れ替わって、ダムゾルになれ。」

アージエンタムはそう言われると、三島の前から姿を消した。

「殺られるなよ・・・。」

三島はそう呟いた。

あれから2時間。

ゴンは待ちクタビレて、地べたに座り込んでいた。

「大介なら来ないよ。」

そう言ったのは、ゴンである。
ゴン？

ちよつと待て。

何故ゴンが二人？

ワームの擬態か？

ゴンは顔を上げると、

「誰？」

と、ゴンに向かって言った。

「貴方よ。」

ゴンはそう言つて、アージエンタムに変態した。
やはりワームか。

あつ——ゴンはそんな顔をする、と、

「私をどうするつもり？」

と、アージエンタムに訊ねた。

アージエンタムは、ワームの言葉で、こう言った。

「お前を殺す。」

「嫌つ、あつち行つて！」

と、ゴン。

「ワーム語が解るとはな。」

ワーム語の解るゴンに、アージエンタムは驚いた。

「お前の体、改めさせて貰う。」

そう言つて、ゴン触れようとした。

「キモイつ、触らないで！」

ゴンはアージエンタムの腕を振り払った。

「貴様つ、殺してやる！」

怒ったアージエンタムは、ゴンに飛び掛かった。

しかしゴンは、素早く避けた。

「良い動きだ。」

では、これならどうだ？」

アージエンタムはクロックアップし、ゴンに体当たりした。

が、寸前の所で、ゴンにかわされてしまった。

（大介っ、助けて！）

その時、ゴンの前に、先程のイトトンボが飛来した。

それに続いて、ドレイクグリップ・・・いや、ダムゾルグリップが、ゴンの前にジョウントして来た。

ゴンがそれをキャッチすると、イトトンボ——ダムゾルゼクターが、グリップに合体した。

このパターン・・・ゴンも変身するのか？

「変身。」

ゴンは試しに言ってみた。

「Henshin!」

その瞬間、ゴンは身長180センチの、ダムゾル・マスクドフォームに変身した。

とても8歳の子供が変身したとは思えないその容姿は、ドレイクのそれにそっくりだ。

「これが、私なの？」

と、思わず口にしたダムゾル。

アージエンタムは、彼女の間を突いて攻撃。

いきなりの変身に、戸惑っていたダムゾルは、アージエンタムの攻撃を受け、地面を転がった。

「格好だけか？」

と、アージエンタム。

その時、一発の光弾が、アージエンタムにヒット。奴を怯ませた。

「ゴンとか言ったな。」

手を貸してやる。」

そう言ったのは、カブト・マスクドフォームである。

「ゴンっ、ヒッチスロットルを引け！」

その言葉に応えて、ダムゾルはヒッチスロットルを引いた。するとアーマーが、ガシャンツと浮き上がった。

「キャストオフ。」

ダムゾルはトリガーを引いた。

「Cast off!」

と、アーマーが吹き飛び、ライダーフォームに移行。

「Change damselfly!」

その容姿は、イトトンボをモチーフにしている。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

アーマーが吹き飛び、カブトホーンが起き上がり、コンパウンドアイが輝き、ライダーフォームに移行。

「Change beetle!」

二人のライダーは、クロックアップを発動し、アージエンタムに接近した。

「待てっ、1VS2は卑怯だぞっ?」

と、焦るアージエンタム。

だが二人は、問答無用で、そいつを攻撃した。

ダムゾルはゼクターウィングを閉じ、手前に倒すと、ヒッチスロットルを引いた。

「ライダーシューティング。」

と、ダムゾルはトリガーを引く。

「Rider shooting!」

ゼクターからタキオン粒子の光弾が放たれ、アージエンタムにヒットした。

光弾を受けたそいつは、宙に舞い上がった。

「One two three!」

カブトはゼクターホーンを展開。

「ライダーキック。」

と、再び展開し、それを発動。

「Rider kick!」

落ちて来たアージエンタムに、カブトは回し蹴りを放った。

「Clock over.」

時間の流れが戻り、ダブル攻撃を喰らったアージエンタムは、爆裂霧散した。

「天道さんだよね?」

そう言つて、手を差し出すダムゾル。

しかしカブトは、握手する事無く、去つて行つた。

ダムゾルが変身を解こうとすると、ドレイクが吹っ飛んで来た。

どうやら、コレオプテラワームのアエネウスとクロセウスにやられらしい。

「大介、遅あい。」

ダムゾルの言葉に、ドレイクはこう言つた。

「どなたですか?」

「私だよ、大介。」

「その声、ゴンか?」

ダムゾルの正体が、ゴンだと分かつたドレイクは、

「丁度良い、手を貸してくれ。」

と、頼み込んだ。

するとそこへ、アエネウスとクロセウスがやって来た。

「ライダーシューティング!」

二人の声が重なつた。

「R i d e r s h o o t i n g!」

放たれたそれは、アエネウスとクロセウスにヒットし、二体共爆裂霧散した。

「うっ!」

ダムゾルは膝ひざを着くと、頭を抱えて叫んだ。

「あいつがつ、あいつが近くにいる!」

そう言つて、変身を解くダムゾル。

「来ないで!」

「ゴン?」

心配するドレイクは、ゴンに声を掛けるが、ゴンの耳には届いてい

なかった。

「きゃあああああ！」

ゴンは悲鳴を上げ、イトトンボのワーム——ダムゾルスワームに変態した。

その状況に、ドレイクは驚き、戸惑う。

ダムゾルスワームは、ドレイクに気付くと、いきなり攻撃をして来た。

その攻撃は、とても威力が高く、ヒビロノカネのアーマーさえ、傷付いてしまう程だった。

「やめろっ、ゴン！」

ゴン相手に、手も足も出ないドレイクは、そう言うしか無かった。しかしダムゾルスワームは、攻撃をやめる事は無く、ひたすら攻撃を続ける。

ドレイクはゼクターウィングを広げ、ヒッチスロットルを引くと、「プットオン！」

と、トリガーを引いた。

「Put on！」

マスクドアーマーが、ドレイクにくつつき、マスクドフォームに戻った。

するとダムゾルスワームはクロックアップ。

目にも留まらぬ速度で、ドレイクに攻撃をした。

「うわああああ！」

ドレイクは吹き飛ばされ、地面に落下すると、変身が解けて、気絶してしまった。

ダムゾルスワームは、ゴンに戻ると、

「私、どうしたんだろう？」

と、首を傾げた。

「大介っ？」

気絶した風間を見付けたゴンは、慌てて彼の下に駆け寄った。

「大介っ、しっかりして！」

ゴンの問掛けに、風間は目を開けた。
「ゴン……。」
風間はそう呟いた。

第20話：ゴン変身！ダムゾルとダムゾルスワーム（後書き）

ダムゾル？

イトトンボって、英語にすると「ダムゾルフライ damselfly」なんだよね。

そしてフライを取ってダムゾルにすると、「少女」になるんだ。

だから、ゴンが装着したのは、「ダムゾル」なんだ。

因みに、ダムゾルスワームはもしりその線の。

第21話：加賀美、ワームと入れ替わる

「ワームか。」

剣はそう言つて、サソードヤイバーを取り出した。

「standby!」

と、サソードゼクターがやって来る。

剣はそれをキャッチ。

「変身。」

と、サソードヤイバーにセットした。

「Henshin!」

剣はサソード・マスクドフォームに変身。ワームに襲い掛かる。

サソードの攻撃を受けたワームは地面を転がる。

するとワームは、起き上がったて脱皮をし、ベルバーワームに移行。

ベルバーワームはクロックアップ。サソードに接近した。

「キャストオフ!」

サソードはゼクターニードルを押し、

「Cast off!」

と、ベルバーワーム諸共アーマーを弾き飛ばし、ライダーフォームに移行した。

「Change scorpion!」

その容姿、女性の様な気がするのは気のせいかな?

「クロックアップ!」

サソードはトレーススイッチに触れ、

「Clock up!」

それを発動。ベルバーワームに襲い掛かる。

その時、ベルバーワームによく似たベルバーワーム・ロタが現れ、

サソードに襲い掛かった。

「分身だど?」

サソードは二体のベルバーワームに攻撃され、動きを封じられてし

まった。

「剣！」

そこへやって来たのは、ガタック・ライダーフォーム。親友を助ける為に現れたのだ。

「手を貸す！」

と、ロタに飛び掛かって攻撃。ガタックダブルカリバーがロタを切り裂く。

「カ・ガミっ、よく来てくれた！」

と、抱きつこうとするサソードだが、ベルバーワームに攻撃をされてしまった。

「こんつのー！」

ライダースラッシュ！」

サソードはフルスロットルを押し。

「Rider slash！」

サソードはヤイバーをベルバーワームに突き刺した。

ベルバーワームは爆裂霧散。

「Clock over。」

と、時間の流れが元に戻る。

またガタックも、ライダーキックを発動し、文字通りロタを瞬殺した。

「うつ！？」

突然、サソードが頭を抱えて座り込んだ。

その様子を見たガタックはサソードに声を掛けた。

「うわああああ！」

サソードは悲鳴をあげて変身を解除。

「あいつがっ、あいつが近くにいる！」

そう言っただけは、スコルピオワームに変身してしまった。

突然の出来事に驚き戸惑うガタック。

そのガタックにスコルピオワームは襲い掛かった。

「うおおああああ！」

ガタツクは悲鳴をあげて吹っ飛ぶ。

スコルピオワームは飛び上がり、ガタツクを地面に叩き付けた。

「うわっ！」

苦痛の叫びをあげるガタツク。

そのガタツクにスコルピオワームは踏み付けた。

「うわああああ！」

背中に激痛が走るガタツク。

「やめる剣！」

お前は恩を仇で返すつもりか！？」

しかし、今の彼にガタツクの言葉など、全く聞こえていなかった。

そんなスコルピオワームの前に、くわがたむし鋏形虫に似たワームが現れた。

差し詰め、トルビワーム・グスタとでも言った所か。

「*@ #£•！（こいつは俺の獲物だ！）」

そう言つて、スコルピオワームを突き飛ばすトルビワーム・グスタ。

ワーム同士の仲間割れか？

トルビワーム・グスタに突き飛ばされたスコルピオワームは地面を

転がり、剣に戻つて気絶した。

「何だか解らないけど、俺を助けてくれたんだな。」

ガタツクはそう言つて、立ち上がった。

するとそこへ、トルビワーム・グスタの一撃が飛んで来た。

ガタツクは地面を転がり、変身が解けてしまった。

トルビワーム・グスタは加賀美に擬態。

「お前には死んで貰う！」

そう言つて加賀美は加賀美を踏み付けた。

「やめろ！」

そう言つた加賀美の手には、ガタツクゼクターが握られていた。

加賀美はトルビワーム・グスタに変態して加賀美を頭上に持ち上げ、

角で挟み込んだ。

そしてその角で加賀美を真つ二つに切断した。

加賀美を殺害したトルビワーム・グスタは再び彼に擬態すると、彼

が付けていたベルトを拾いあげ、それを腰に装備した。
こうして加賀美は、ワームと擦り替えられてしまった。
なんとも不幸な話で・・・ある。

剣が目覚めたのは、それから数時間後の事。

そこには加賀美がいた。

「カ・ガミっ、俺は一体どうしてしまったと言っただけ？」

「お前はあの時、サソリのワームにやられて気絶したんだ。」

「それでそいつはどうした！？」

「逃げて行っただよ。」

「そうか。」

第21話：加賀美、ワームと入れ替わる（後書き）

加賀美を暴走させるつもりが、物語が暴走して、こう言う結末になっ
てしまいました。

第22話：暴走する物語

その日、天道はZECTの入隊試験を受けに来ていた。

「あれっ、天道じゃないか。」

そう言ったのは加賀美だ。

加賀美はこのZECTの隊員である。

「なんだ、加賀美か。」

天道はそう言っただけ顔をあげた。

天道は立ち上がり、

「丁度良い。」

お前に話がある。」

と、加賀美を外に連れ出した。

「何だよ、話って？」

加賀美は背中を向けている天道に聞いた。

「ZECTの入隊試験を受けた。」

「え？」

「聞こえなかったか？」

ZECTの入隊試験を受けたんだ。」

そう言っただけ加賀美に顔を向ける天道。

加賀美はその天道に、

「ちよつと待って。」

あれだけ入るのを拒んでいたお前が？

それで、どうだったんだ？」

「合格だ。」

今日から指令官だ——と、続ける天道。

「それじゃ、俺の上司って事か！？」

加賀美はそう言った後、

「最悪だ。」

そう呟いた。

「そう言う訳だから、俺の家でパーティをする！
お前も来い！」

天道そう言って、加賀美を横切って去って行った。

加賀美と別れた天道は、ビストロ・ラ・サルにやって来た。

「ひよりっ、今日俺の家でパーティをする事になった。」

「それをわざわざ伝えに来たのか？」

「違う、連れに来たんだ。シェフとしてな。」

「何でボクが？」

と、ひよりはテーブルを拭きながら言う。

「お前は俺より腕がある。」

「嫌だ。」

ボクはいかない。」

あっさり断られ、テンションが下がって落ち込む天道。
すると、窓を叩く音が聞こえた。

天道が窓に目をやると、カブトゼクターが飛んでいた。

天道は直ぐに外へ出た。

人混みの中で、人々を襲い、殺戮を繰り返すワーム集団。

そこへやって来る一台のバイク。

それに乗っているのは、天道 総司である。

天道はバイクの前輪を浮かせ、ワームに襲い掛かる。

更にそこへ、もう一台のバイク。乗っているのは、影山 瞬だ。

「指令官！」

影山そう言って、バイクを停めた。

「遅いぞ影山！」

そう言い、影山にライダーブレスを投げる天道。

影山はそれをキャッチして、

「これは！？」

「ザビーはお前を選んだ。」

ザビー・ゼクターを手に、そう言う天道。

「変身しろ影山！」

と、ゼクター影山に放り投げる。

「変身！」

影山はゼクターをキャッチし、ライダーブレスにセットする。

「Henshin！」

その瞬間、影山はみるみる内にザビー・マスクドフォームに変身した。

続いて天道も、カブトゼクターを召喚してベルトにセット。カブト・マスクドフォームに変身した。

「影山、クロックアップでワームを一掃する。」

そう言つて、カブトはキャストオフし、ライダーフォームへ移行した。

「キャストオフ！」

ザビーはゼクターウィングを展開。ゼクターを180度回転させる。

「Cast off！」

アーマーが吹き飛び、ザビーはライダーフォームに移行。

「Change wasp！」

それを合図に、カブトはサイドバックルを叩いてクロックアップをする。

「クロックアップ！」

ザビーはトレーススイッチに触れ、

「Clock up！」

と、それを発動。ワーム共に攻撃をする。

仕事を終えたひよりは、自宅へ向けて自転車を走らせていた。

そんな彼女の下に、ウスバカゲロウに似たシシーラワームが現れた。ひよりは急ブレーキを掛け、転んでしまった。

「何なんだお前？」

ひよりは問うが、シシーラワームは問答無用で彼女を襲う。

「ライダーキック。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Rider kick!」

と、それを発動したカブトは、ワームに回し蹴りを放った。

「Clock over。」

ワームは爆裂霧散。またザビーも、ライダースティングでワームを撃破していた。

ワームを全て倒したカブトとザビーは、お互い変身を解いた。

「影山……。」

「はい。」

「初戦にしては、なかなかだったぞ。」

天道はそう言い、バイクに乗って去って行った。

第22話：暴走する物語（後書き）

物語が暴走し始めました。

お婆ちゃんが言っていた。

暴走を始めてる世界を元に戻すにはもう時間が無いってな。
そう言う訳だから、このまま行きますよ。

第23話：更なる暴走

突如、ひよりの前に現れ、容赦なく彼女を襲うシシーラワーム。ひよりはその攻撃を何とかかわし、その場から逃げ出した。

しかし、シシーラワームはクロックアップ。ひよりの正面に回ると、砂鉄砲で彼女の足を封じた。

ひよりは足を動かせなくなり、大ピンチである。

「ひよりっ、突然出て・・・って・・・。」

ビストロ・ラ・サルに入った天道が途中まで言い掛けると、

「ひよりちゃんならさつき帰ったわよ。」

と、店の奥から弓子の声。

「それより天道君。今日はバイク？」

その問いにイエスと答える天道。

「じゃあさ、3丁目の魚屋さんで鯖買って来てくれないかしら？鯖切らして、天道君の大好きな味噌煮が作れないのよね。」

弓子はそう言っ、天道にお金を渡しに来た。

「じゃあ、お願いね。」

弓子にお願いされた天道は店を出て3丁目の魚屋に向かった。

ひよりは自宅で日記を書いていた。

『今日、羽が生えた変な奴に襲われた。』

（そう言えば天道の奴、どうしてるかな？

後で様子を見に行つてやろう。）

そんな事を考えながら、日記を続けるひより。

そのひよりに、シシーラワームの幻体が重なる。

「言われた通り3丁目の魚屋で鯖買って来たぞ。」

そう言っ、手に持った袋を弓子に渡す天道。

弓子はそれを受取り、鯖を冷蔵庫にぶちこんだ。

「お釣りだ。」

「あ、それ貰って。」

鯖の配送料よ。」

「そう言う事なら貰っておく。」

しかし、鯖なら松輪の丸特が美味しい。」

「そうなんだ。」

でも、此処は3丁目の魚屋さんって決めてるの。」

「そうか。」

そう言つて、サルを出て行く天道。

が、弓子がそれを引き留め、

「留守番、お願いして良いかしら？」

天道は酷く落ち込み、客席に座り込んだ。

「ごめんね。直ぐ戻って来るから。」

そう言つてサルを出て行く弓子。

それと入れ替わりに、麗奈が入って来る。

「お前か。どうした？」

「手下から入った情報だ。」

ひよりと言う者がワームに襲われたらしい。」

「何！？」

天道は立ち上がり、サルを出て行つた。

ピンポン！

——チャイムと共に、ひよりの部屋に入つて来る天道。

「ひよりっ、無事か！？」

そう言つて、ひよりを抱き抱える天道。

「話を聞いた。」

変な奴に襲われたらしいな。」

「天道。」

「どうした？」

「苦しいから放してくれ。」

その言葉に、申し訳ない気持ちで、ひよりを解放する天道。

天道はビストロ・ラ・サルに戻っていた。

「どうしたんだ？」

浮かない顔をしている天道に麗奈は声を掛けた。

「本当の事を話してくれないか？」

「え？」

「ひよりの事だ！」

と、天道は顔をあげ、すつくと立ち上がって、

「あの後ひよりはどうなったんだ!？」

取り乱す天道に麗奈は、

「ワームに擬態された。」

お前が会ったのはそのワームだ。」

それを聞いた天道は腰を落とす、

「そうか。」

と、呟いた。

「麗奈・・・——悪いが一人にしてくれ。」

天道はそう言って、麗奈をサルから追い出した。

（ひよりっ、俺はどうすれば良いんだ!？）

第23話：更なる暴走（後書き）

な、な、ぬぁんとつ、ひよりまでワームになってしまいました。

一体、この先どうなるのかっ!?

天道はひよりを倒すのかっ!?

その真相は次回!

天道の道を往き、総てを司る!

第24話：天道とひより（前書き）

一部修正

第24話：天道とひより

「話って何ですか？三島さん。」

影山はそう問う。

「新たなワームだ。倒せ。」

三島はそう言つて、ひよりが写った写真見せる。
するとそこへ天道が現れてこう言う。

「そう言う事は指令官を通して欲しいものだな。」

「君は確か、新米の天道だったか？」

「影山、そのワームは倒す必要無い。」

「どう言う事ですか指令官!？」

「それはその三島とやら良く知っている……——答えて貰おうか、ZECTの裏の顔について。」

と、三島を睨み付ける天道。

「君に教える筋合いは無い。」

「なら俺が答えてやろう……。」

そう言つと、ZECTが裏でワームを操っている事、世界征服を企んでいる事を話した。

しかし三島はこんな事を言う。

「我々に限つてそんな事は無い。」

もし、そうなら証拠を持つて来る事だ。」

その言葉に天道は、出す言葉を失った。

「兎に角、今はこのワームを倒せ。」

そう言つて、再びひよりの写真を見せ付ける三島。

「行くぞ、影山。」

そう言つて天道は、影山と去つて行つた。

目の前に海が広がる原っぱの崖。そこにポツンと佇む^{たたず}数個の墓石。
ひよりはそのく目下部>と掘られた墓石の前にいた。

「こんな所にいたか。」

と、背後から聞こえる声。その主は天道である。

ひよりは後ろを振り返った。

「どうしてこの場所が？」

「竹宮に聞いた。」

「ボクに用か？」

「ちよつと顔が見たくなつてな。」

「何だよそれ？」

天道とひよりが話をしていると、サソードヤイバーを持った剣が現れた。

「そこのお前、その女から離れる。」

「Stand by！」

と、サソードゼクターが地面から現れ、剣の手に納まった。

「変身！」

剣はゼクターをヤイバーにセット。

「Henshin！」

その瞬間、剣はサソード・マスクドフォームに変身した。

「天道、これはどう言う事だ？」

と、ひよりはシシーラフォームに変態。クロックアップしてサソードに襲い掛かった。

「キャストオフ！」

サソードはゼクターニードルを押し込む。

「Cast off！」

と、シシーラフォーム諸共アーマーを吹き飛ばしてライダーフォームに移行。

「Change scorpion！」

「ひよりっ！？」

天道は吹き飛ばされたシシーラフォームをキャッチして抱き抱えた。

「怪我は無いかひより！？」

すると突然、天道にシシーラフォームの拳こぶしが飛んで来た。

天道はその拳を顔面に喰らって怯み、その隙にシシーラワームが天道の後ろに回り込み、首に腕を巻き付けて人質にした。

シシーラワームは人の言葉で、

「こいつは人質だ。」

一歩でも動いたらこいつの命は無い。」

と、サソードを脅した。

「己ワーム目！」

と、動きを止めるサソード。

「離せひより。」

「人質は黙っている。」

シシーラワームはそう言って、天道の首を絞めた。

「がっ、がなぜいより（離せひより）。」

天道が言い終わると、シシーラワームの頭に天道の声が響いた。

「俺を解放して逃げる！」

奴は俺が倒す！」

その謎の声にシシーラワームは腕を緩めた。

するとそこへ、カブトゼクターが飛来し、天道のベルトに納まった。

「変身。」

「Henshin！」

その瞬間、天道はカブト・マスクドフォームに変身。カブトクナイガンを装備してサソードに光弾を撃ち込んだ。

「ひよりっ、お前は俺が守る！」

そう言いながら光弾を放ち続けるカブト。

が、サソードはトレーススイッチに触れてクロックアップ。カブト

を弾き、シシーラワームに襲い掛かった。

「キャストオフ。」

ゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

と、アーマーを弾き飛ばし、カブトホーンを起こし、コンパウンドアイが光る。

「Change beetle!」

スピード重視のライダーフォームに移行したカブトはサイドバックルを叩いてクロックアップ。サソードの肩に蹴りを入れた。

「貴様!」

と、サソード。

「うつ!?!」

サソードは急に頭を抱え、変身を解いた。

「うわああああ!」

剣は悲鳴をあげ、スコルピオワームに変態してしまった。

「正体を現したか。」

カブトはそう言っ、て、スコルピオワームに襲い掛り、追い詰めて行った。

「オリジナルの為にも、眠って貰おうか。」

そう言っ、てカブトはフルスロットルを押す。

「One two three!」

カブトはゼクターホーンを展開。

「ライダーキック。」

再度展開し、

「Rider kick!」

と、それを発動。カブトはスコルピオワームに回し蹴りを放った。

しかし、ガタツクが現れ、それを受け止めた。

「やめる天道!」

カブトは足を降ろし、

「どう言っ、つもりだ?」

と、ガタツクに問う。

ガタツクはスコルピオワームを指差しながら、

「こいつは、俺の親友なんだ!」

「ワームの親友か。」

お前、本気で言っ、てるのか?」

「五月蠅い!」

ガタツクはそう言って、カブトをダブルカリバーで切り付けた。その衝撃で、カブトは後ろへ下がって怯んだ。

「One two three!」

と、フルスロットルを押し、ゼクターホーンを展開。

「ライダーキック!」

と、再び展開し、

「Rider kick!」

と、ガタツクはそれを発動し、カブトに跳び蹴りを放った。

「Clock over.」

「うおわあああ!」

カブトは悲鳴をあげて宙を舞い、地面に墜落して変身が解けた。

「加賀美・・・——お前本気で!?!」

と、ゆっくり立ち上がる天道。

「まだ立てるのか?」

「生憎、死ぬ訳にはいかないんでね!」

「ならせめて、そのベルトだけでも破壊させて貰う!」

そう言っただ道に歩み寄るガタツク。

が、そうはさせまいと、シシーラワームがガタツクの前に立ちはだかった。

「よせひより!」

と、天道はシシーラワームを制したが、聞き入れては貰えなかった。

「ほお、俺達ワームを裏切るのか。」

（ワーム? 加賀美の奴、ワームなのか?）

そう思う天道。

「天道は、ボクを殺そうとしたそいつから、ボクを守ってくれた。ボクが守らないで、誰が守るんだ?」

その言葉にガタツクは一瞬、スコルピオワームの事を見た。

その隙にシシーラワームはクロックアップ。天道を抱えて逃げ出した。

第24話：天道とひより（後書き）

やっぱり、天道はひよりを守るのね。

第25話：襲い来るワームの心

天道が目覚めたのは、ふかふかのベッドの上。

「此処は？」

「ボク・・・ひよりの家だ。」

そう言ったのは、ひより姿のシシーラワームである。

「お前、俺の事？」

「お前はボクの恩人だ。」

「当然の事をしたまでだ。」

それに・・・。」

と、言うのを躊躇う天道。

その天道にひよりは、

「それに何だ？」

それから暫く沈黙が続き、天道は口を開いた。

「7年前・・・渋谷引責により、渋谷は瓦礫の山となった。」

ひよりはその言葉を、自分の思いでの様に、思い出しながら聞く。

「その時、一人の少女と両親が生き別れになった。」

ひよりの頭にその日の光景が浮かぶ。

「するとそこへ、一人の男の子がやって来る・・・。」

そう言った瞬間、天道の頭に激痛が走る。

「うっ!？」

と、頭を抱えて苦しみだす天道。

（なっ、何なんだ!？

思い出そうとすると、頭が割れる程!）

「どうしたんだ？」

と、声を掛けるひより。

「うわあああああ!」

天道は悲鳴をあげた。

（思い出した。

あの日、俺はかぶと虫のワームに襲われてる・・・。

そして、俺はそのワームに！

違う、俺がそのワームなんだ！

今、全てを思い出した天道。

「うわあああああ！」

その天道にワームの心が襲う。

「うわあああああ！」

天道は悲鳴をあげ、カスクワームに変態。窓ガラスを破って飛び出して行った。

部屋に残されたひよりは、家を飛び出し、天道を追った。

瓦礫に埋もれた渋谷。そこには一ヶ所だけ、崩れなかった地下研究施設がある。

天道はその奥にある独房に幽閉されていた。

「よう、元気にしてるか？」

そう天道に声を掛けるのは三島だ。

その三島に、天道は何かを言おうとするが、

「うつつ・・・うつつ。」

と、喉から出るのは唸り声だけ。

「どうした？」

7年間そこにいて、出せるものも出せなくなったか？」

三島がそう言った瞬間、カスクワームが現れ、三島を襲った。

「お・・・ま・・・え・・・は！」

と、天道の口が動いた。

それを聞いたカスクワームは振り向いて鉄格子を破壊。天道に襲い掛かった。

そのお陰か、天道に繋がっていた鎖が切れ、天道は自由の身になった。

すると天道の下に、黒いカブトゼクターが飛来した。

天道はそれを掴み、ベルトにセットした。

「へん・・・しん。」

「Henshin!」

その瞬間、天道はカブト・マスクドフォームに変身。しかし、どこか違う。

よく見ると、目の色が黄色になっている。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

アーマーを弾き飛ばし、カブトホーンを起こし、ライダーフォームに移行。

「Change beetle!」

そのカブト、目が黄色でライダーアーマーが黒に近い赤で、黒い染みの様なものが付いている。

ダークカブトか。

ダークカブトは前傾姿勢で、カスクワームに歩み寄り、カスクワームを殴り飛ばした。

カスクワームは壁に激突し、頭を打って理性を取り戻した。

「お前は・・・そうか。」

そう呟いた後、天道に擬態してカブトゼクターを召喚。

「変身!」

天道はゼクターを掴んでベルトにセット。

「Henshin!」

と、カブト・マスクドフォームに変身した。

その時生じた波動がダークカブトを弾き飛ばす。

「キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

アーマーを弾き飛ばし、カブトホーンを起こし、コンパウンドアイが発光。

「Change beetle！」

と、ライダーフォームに移行。

「所詮偽物は偽物。」

カブトはそう言って、ダークカブトに襲い掛かる。

第25話：襲い来るワームの心（後書き）

何か訳解らなくなつて来たぞ？

第26話：謎のライダー

「Rider kick!」

二体のカブトは同時にライダーキックを放った。

カブトとダークカブトの足同士が触れ大爆発。カブトとダークカブトは退ける様^{しっぞ}に吹き飛び、両者は壁に当たって変身が解けた。

ビストロ・ラ・サルの客席で、食後のコーヒーをすすする天道。

（あいつ、死んだと思っていたが・・・。）

天道はカップの底に残った一口分のコーヒーを飲み干した。

「天道。」

背後でそう言ったのは、加賀美だ。

「貴様か。」

何の用だ？」

「お前を殺しに来た。」

「俺には貴様の相手をしてる暇は無い。他の日してくれ。」

そう言つて、サルを出て行く天道。

加賀美はそれを追い、トルビワーム・グスタに変態して襲い掛かった。

「だが、ワームなら話は別だ!」

天道は素早く避け、カブトゼクター召喚。

「変身!」

天道はゼクターをベルトにセット。

「Henshin!」

その瞬間、天道はカブト・マスクドフォームに変身。その衝撃波でトルビワーム・グスタを吹き飛ばした。

「お前がいては加賀美の為にはならない。」

カブトはそう言い、カブトクナイガンの引金を引き、トルビワーム・グスタに光弾を放った。

光弾はトルビワーム・グスタに当たり、そいつを怯ませる。

カブトはその隙にクナイガンをひっくり返し、トルビワーム・グスタに接近し、クナイガンを振り下ろした。

が、そこに甲虫かぶとむしをモチーフにしたトルビワームが現れ、カブトに体当たりをした。

「双子か・・・」

キャストオフ。」

カブトはゼクターホーンを展開し、キャストオフしてライダーフォームに移行した。

「Change beetle！」

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、それを発動。トルビワームを瞬殺した。

「Clock over。」

その声と共に、時間の流れが元に戻る。

「貴様つ、よくも兄貴を！」

トルビワーム・グスタは加賀美に擬態。

「Hyper clock up！」

その瞬間、トルビワーム・グスタは消滅。カブトは謎の衝撃波によって吹き飛ばされた。

「Hyper clock over。」

その音声と共に、カブトそっくりのライダーが現れた。

「お前は一体？」

カブトはそいつに問うが、そいつはなんの言葉も残さず、カブトの目の前から消え去った。

カブトは辺りを見回す。

しかしそいつは何処にもいなかった。

カブトは変身を解き、「何だ？」と言う顔で去って行った。

あのカブトそっくりなライダー。一体、何者なのか？

第26話：謎のライダー（後書き）

ナ：「あのライダー、一体何者？」

天：「その答えは次回だ。」

作：「天さん、何仕切ってるの？」

第27話：呪いのサソードヤイバー

ZECT本部の一室に、三島と麗奈はいた。

「裏切り者のワームが何の用だ？」

「ハイパーゼクターを渡せ。」

「貴様にこれは渡さない。」

そう言つて、ハイパーゼクター入りジュミラルミンケースを金庫にしまふ三島。

「既にハイパーカブトが現れている。」

何れ、ハイパーゼクターはカブト^{いす}の物となる。」

「ふっ、そうはさせないさ。」

と、その時、天道がやって来た。

「裏切り者のワーム・・・やはりZECTはワームと組んでいたか。」

「

何の用だ？」

「今話していたハイパーゼクターとは何だ？」

「貴様如きに教える筋合いは無い。」

三島がそう言つと、

「クロックアップを超えるハイパークロックアップを使用可能にする新型のゼクターだ。」

と、麗奈が言つた。

「余計な事を言うな。」

と、麗奈を横目で睨み付ける三島。

「その新型ゼクターとやらを、俺によこせ。」

「悪いがそれは出来ない。」

既にハイパーゼクターには試験体がある。」

「試験体？」

「お前が知る必要は無い。」

三島がそう言つと、天道は鼻を鳴らしてこう言つた。

「まあよい。何れ、ハイパーゼクターは俺が手に入れる。帰るぞ麗奈。」

そう言つて、天道は麗奈と共に去つて行つた。

ビストロ・ラ・サルの客席に、天道は座つてひよりのまかないを食していた。

「ひよりっ、味が落ちているぞ!」

何時もと違うサバの味噌煮を食つた天道はそう言つた。

「文句を言つなら食べるな。」

ひよりはそう言つて、サバの味噌煮を取り上げた。

天道は慌てて、

「おいっ、勝手に片づけるな!」

そう言つたが、時既に遅し。ひよりは既に捨ててしまつていた。

「カ・ガーミは来てるか?」

突然、剣がそう言つて入つて来た。

「加賀美なら此処にはいない。」

天道はそう言つた。

「そうか、それは残念だ。」

と、剣は残念そうに出て行く。

その剣に天道は、

「待て。」

と、肩を掴んだ。

「何だ?」

剣は振り向いた。

「サソードゼクターとサソードヤイバーをよこせ。」

「何?」

「ライダーシステムをよこせと言っているんだ。」

「それは聞けないな。」

神に代わつて剣を振るう男にとってサソードヤイバーは大事な物だ。他人には渡せない。」

「そうか・・・——なら、これで決めるか？」

そう言つて、天道はゼクターを召喚し、掴んだ。

「貴様、あの時の！」

「ほお、覚えていたか。」

「俺が忘れる訳が無い！」

そう言つと、剣はサソードゼクターを召喚。

「Stand by。」

「変身！」

と、剣はゼクターをヤイバーにセットした。

「Henshin！」

その瞬間、剣はサソード・マスクドフォームに変身。

「外へ出る！」

天道はそう言い、サソードを外へ蹴り飛ばした。

「変身！」

と、ゼクターをベルトにセット天道は、カブト・マスクドフォームに変身し、外へ飛び出した。

その時、無数のアーマーが、カブト目掛けて飛んで来た。

（空中じゃ避けられない！）

そう思つたカブトは、

「キャストオフ！」

と、ゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

アーマーを吹き飛ばし、飛んで来たアーマーを相殺。

「Gangge beetle！」

するとサソードは、

「クロックアップ！」

と、トレーススイッチに触れ、

「Clock up！」

それを発動したサソードは、目にも留まらぬ速度で連撃を繰り出した。

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up!」

と、それを発動して、サソードに激突した。

「うわ!」

激突の衝撃で、両者は地面を転がる。

サソードは立ち上がり、

「ライダースラッ・・・うっ!」

突然苦しむサソード。

異変に気付いたカブトは、サソードの様子を伺った。

（あれは?）

サソードやイバーのアポーツグリップから黒い影が出ているのに気付いたカブトは不審に思った。

「うおおおおお!」

サソードは叫びながら変身を解除。剣の体に異変が現れる。

「どうした?」

カブトは剣に訊ねた。^{たず}

が、剣にその声は聞こえない。

そして、剣はスコルピオワームに、変態してしまった。

「そう言う事か。」

全てを把握したカブトは、スコルピオワームに襲い掛かった。

「剣に体を返してやれ。」

カブトは攻撃をしながら、スコルピオワームにそう言った。

すると剣の幻体が現れ、こう言う。

「それは出来ない。」

動ける体を手に入れたんだ。このチャンス、無駄にする訳にはいかない!」

そう言って、スコルピオワームは剣の幻体をしまい、カブトに反撃した。

「ほお、幻体を使わなきゃ喋れないのか。」

そう言いながら、カブトはスコルピオワームの攻撃を避け、ラッシュ攻撃をする。

「悪いがこれで終りだ！」

と、カブトはカブトクナイガンでスコルピオワームに突き刺した。グサツ！

——スコルピオワームの腹に風穴が開く。

同時に、剣の体がスコルピオワームから分離した。

スコルピオワームは黒い影に包まれ、サソードヤイバーに戻った。

（これは危険だ。）

そう思ったカブトは、サソードヤイバーを拾った。

「何！？」

カブトはヤイバーを手放そうとしたが、先程の黒い影がアポーツグリッブから現れ、カブトの手に絡み付いた。

（俺とした事がっ！）

カブトは苦しみながら、反対の手で、必死にヤイバーを引き離そうとした。

しかし、ヤイバーと手は黒い影で、しっかりと固定されている。

「うわああああ！」

カブトは変身を解き、叫び声をあげた。

「よせっ、入って来るな！」

天道は怒鳴った。

「き、貴様なんかに、俺の体は渡さん！」

しかし黒い影は、消える事無く、徐々に天道を包み込んで行く。

「うわあああああ！」

そしてついに、黒い影は天道を完全に包み、天道の体内に入り込んだ。

すると、天道は不気味に微笑んだ。

第27話：呪いのサソードヤイバー（後書き）

マジっすか!？

第28話：麗奈×サソード（前書き）

タイトル思い付きませんでした。

第28話：麗奈×サソード

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

と、トンネルの中に、何者かの吐息が響く。

その何者かは、腰にライダーベルトをしていた。

「そ・・・ろそろ、限・・・界・・・。」

何者かはそう呟くと、気絶して、倒れてしまった。
すると、瞳が真っ黒に染まり、不気味に微笑んだ。

「やっと、意識を失ったか。」

そう呟くと、何者かはゆっくり起き上がった。

その何者かが、天道である事は、言うまでも無い。

「ほお、そいつを完全に乗っけるとは、対した奴だ。」

突然、背後から声が聞こえた。

「誰だ!？」

と、天道が振り向くと、カスクワームの幻体が立っていた。

「俺は、そいつの本当の姿だ。」

カスクワームは天道を指して言った。

「どう言う事だ？」

「俺は今まで、人間の、天道の心に封印されていた。

だが、お前が入って来てくれたお陰で、俺はまた、こうして出て来られた。感謝する。」

「何だか知らんが、この体はお前のか。」

「そうだ。これからは、お互い仲良くしよう。」

そう言うのと、幻体は天道の体と重なって消えた。

直後、トンネル内にバイクの音が響き、影山 瞬がやって来た。

「指令官、こんな所で何をしてるんですか？」

「影山か。」

折角だ、貴様で試してやろう。」

そう言うのと、天道はカブトゼクターを召喚し、カブト・マスキッドフ

オームに変身した。

「し、指令官？」

「ふあっ！」

突然、カブトは影山に襲い掛かった。

影山は素早く避けて、

「何をするんですか!？」

と、ザビーゼクターを召喚し、ザビー・マスクドフォームに変身した。

その瞬間、無数のアーマーが飛んで来て、ザビーは吹き飛ばされてしまった。

「し、指令官！」

三島さんが言っていた事は、本当だったんですか!？」

ザビーは着地してそう言った。

「Clock up！」

カブトはクロックアップを発動し、ザビーに飛び掛かった。

「キャストオフ！」

ザビーは素早くゼクターウィングを展開し、ゼクターを180度回転させる。

「Cast off！」

その瞬間、アーマーと共に、迫り来るカブトは吹き飛んだ。

「Change wasp！」

と、ザビーはライダーフォームに移行した。

「指令官!？」

ザビーはそう言い、墜落したカブトに駆け寄った。

「大丈夫ですか!？」

その問いにカブトは起き上がり、ザビーを思いつ切り蹴った。

「うわっ！」

ザビーは地面を転がる。

「指令官・・・——オンドウルルラギッタンディスクー（本当に裏切ったんですか）!？」

が、その言葉は、カブトには行き届いていない。

「One!」

と、カブトはフルスロットルを押し始めた。

「Two three!」

カブトはゼクターホーンを展開。パワーをチャージすると、再び展開した。

「Rider kick!」

カブトはそれを発動し、ザビーに回し蹴りを放った。しかし、それはザビーの顔面ギリギリで止まった。

（何故だ!?）

カブトは驚いた。

何故なら、ウカワームがそれを受け止めていたからだ。

「天道を解放しろ!」

ウカワームはそう言って、カブトを投げ飛ばした。

「うわああああ!」

カブトは宙を舞うと、地面に墜落した。

「邪魔すんじゃねえ!」

と、カブトは体制を立て直し、ウカワームに襲い掛かった。
「ぐっ!」

ウカワームはカブトに押し倒され、首を絞められた。

呼吸が出来なくなったウカワームは、徐々に苦しくなってきた。

（い、息が・・・。）

と、心の中で呟くウカワーム。

「貴様の様な裏切り者は始末してやる。」

そう言って、カブトは首を絞める力を強くした。

もう、ウカワームはうめき声を出せない。

「ほらほら、良い気分だろ、お友達に殺されるのは?」

（こ、殺される!?）

ウカワームは焦りながら必死にもがいた。

「無駄だ!」

と、カブトは怒鳴り付けた。

すると、天道の幻体が現れ、カブトに重なった。

「麗……奈……。」

天道はそう呟いた。

すると、カブトは急に頭を抱え、悲鳴をあげた。

「うわああああ！」

その隙に、ウカワームはカブトを吹き飛ばした。

地面を転がるカブト。

「や、やめろ！」

俺が、俺じゃなくなる！」

「言った筈だ、貴様に俺の体はやらないと！」

「うわああああ！」

カブトは悲鳴をあげ、変身を解除した。

その瞬間、天道の体から黒い影が吹き出して行く。

そして、全てが抜け切ると、その黒い影は形を変え、スコルピオワームの姿になった。

「はあ……はあ……はあ……。」

と、息を切らす天道。

「貴様！」

と、スコルピオワームは、天道に襲い掛かった。

「うおわああああ！」

天道は宙に舞った。

その時、天道はサソードヤイバーを落としてしまった。

「麗奈！」

「分かった。」

ウカワームはそう言い、サソードヤイバーをキャッチした。

「Standby。」

と、サソードゼクターが地面から飛び出して来る。

ウカワームは麗奈に戻り、サソードゼクターをキャッチ。

「変身。」

麗奈はゼクターをヤイバーにセット。

「Henshin!」

その瞬間、マスクドライダーシステムが起動をし、麗奈は、サソード・マスクドフォームに変身した。

「ワームが、変身した!？」

ザビーは驚いた。

「キャストオフ。」

サソードはゼクターニードルを押し込む。

「Cast off!」

アーマーが吹き飛び、ライダーフォームに移行。

「Change scorpion!」

第28話：麗奈×サソード（後書き）

うわあ、良いところで終りか。

天：「我慢しろ」

第29話：カフトVSスコルピオワーム（前書き）

「オドウル語は良くない。」
それがどうした！？

第29話：カブトVSスコルピオワーム

「Change scorpion!」

と、サソードはライダーフォームに移行した。

「うわ!」

天道は墜落。

「天道、やれるか?」

サソードの問いに、

「当然だ!」

と、天道は立ち上がると、カブトゼクターを召喚。

「変身!」

天道はカブトゼクターをバツクルにセット。

「Henshin!」

天道はカブト・マスクドフォームに変身。

「キャストオフ。」

ゼクターホーン展開。

「Cast off!」

アーマーが吹き飛び、顎のローテートを基準に、カブトホーンが起き上がると、コンパウンドアイが発光し、

「Change beetle!」

と、ライダーフォームへ移行完了の合図。

「クロックアップ。」

と、カブトがサイドバツクルを叩き、サソードがトレーススイッチに触れる。

「Clock up!」

その瞬間、二人のライダーは、目にも留まらぬ速さで、スコルピオワームに接近した。

すると、スコルピオワームもクロックアップをし、両腕を広げて走り出した。

その速さは、クロックアップを超えていた。

「Clock over.」

二人はスコルピオワームに一瞬で薙ぎ倒され、クロックアップを強制解除されてしまった。

二人は同じ事を思った。

（（速い・・・））

その二人に、スコルピオワームはこう言う。

「もう終わりか？」

「まだだ・・・」

そう言つて、カブトは立ち上がる。

「お婆ちゃんが言っていた。」

俺の進化は光より速い。全宇宙の何者も俺の進化には付いて来れない。

良く見えている。進化した俺の力を。」

お婆ちゃんが本当に言ったのかは定かでは無いが、カブトはそう言つて左手を上にした。

すると、そこだけの時間が歪んで空間に穴が開き、三島が金庫にしまった筈のハイパーゼクターが現れた。

カブトはそれを掴み取り、左のバックルに設置した。

「ハイパーキャストオフ！」

カブトはハイパーゼクターのゼクターホーンを展開。

「Hyper cast off！」

その時、カブトは一瞬、白く光り、ハイパーフォームへとフォームチェンジした。

「Change hyper beetle！」

と、フォームチェンジ完了の合図。

「ハイパー、カブト・・・」

ウカワームはそう呟いた。

「ハイパークロックアップ。」

と、ハイパーカブトはスラップスイッチを叩く。

「Hyper clock up!」

すると、両腕、胸、背中、両足に付いたカブテクターが開き、ウカワームの目の前から忽然と姿を消した。当然、ザビーとスコルピオワームにもそう見えた。

「Hyper clock over.」

その瞬間、スコルピオワームは爆発四散し、ハイパーカブトが二人の目の前に現れた。

「うっ!」

ハイパーカブトは脱力し、その場に倒れ、ライダーフォームに戻ってしまった。

「司令官!？」

と、ザビーは変身を解除し、カブトに駆け寄る。

そしてサソードも、変身を解いて、カブトに歩み寄る。

「大丈夫か?」

麗奈はそう問う。

「新たなパワーに体が付いて行けなかったただけだ……。」「
そう言うと、カブトは気絶して変身が解けた。」

第29話：カブトVSスコルピオワーム（後書き）

ハイパーカブト漸く登場。

ってか、2話しか経ってないし・・・。

第30話：もう一人の自分

最近、天道は悪夢に悩まされていた。と言うか、現実にも悩まされていたと言った方が良さだろう。

何故なら、ここでの所戦いが終わると、ワーム化が起こる様になっていたからだ。そして今日も・・・。

「はっ！」

カブトはカブトクナイガン・アックスモードで、自分の周囲のワーム達を一匹ずつ倒していた。

（切りが無いな）

カブトはゼクターホーンを展開した。

「Cast off！」

Change beetle！」

と、ワーム諸共アーマーを吹き飛ばし、顎のローテートを基準にカブトホーンを起こし、ライダーフォームに移行した。

「クロックアップ」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、それを発動し、目にも留まらぬ速度で、周囲のワームをカブトクナイガン・クナイモードで切り裂き、全滅させた。

「Clock over。」

その瞬間、ドーンッと言う爆音と共にサリス達は一斉に爆発した。

その直後、黒装束の女が現れ、こう言った。

「マスクライダーカブト、よく私の僕達^{しもべ}をやってくれたな」

カブトはその女の方を振り向き、

「またワームか」

と、呟いた。

その女はカブトの言葉に応えるかの様に、成虫ワームに変態した。

そいつは、かぶと虫の雌をモチーフにしていた。

<カスクワーム・ウーマン>——とでも言っておこう。

カブトはそのワームに、心臓をドクドクと高鳴らせた。

（何だ、この感覚・・・）

カブトは心中でそう呟いた。

そのカブトにカスクワーム・ウーマンは、突然クロックアップで襲い掛かった。

「うわっ！」

カブトは突き飛ばされた。

ドカツ！——カブトは地面に落ちた。

（油断した・・・）

カブトは立ち上がり、クロックアップを発動し、カスクワーム・ウーマンに襲い掛かった。

「はっ！」

カブトクナイガンで切り付けるカブト。しかし、カスクワーム・ウーマンは全くダメージを受けていなかった。

カスクワーム・ウーマンは思った。

（あいつら、こんな雑魚にやられたのか。情けない・・・）

ウーマンは心中でそう呟くと、カブトに回し蹴りを放った。

「ライダーキック!?」

カブトは驚いて口にした。

ドーン！——カブトにウーマンの足が触れた時、爆発が起き、カブトは爆風で吹き飛ばされた。

「うおおああ！」

ドカツ！——カブトは地面に落下した。

「カブト・・・——本気を出していないな。」

私の計算では貴様と私は同レベルの筈だ。本気で戦え」

その時、カブトに異変が現れた。

「うわああああ！」

カブトは頭を抑えながら悲鳴をあげた。

（どうしたと言うのだ？）

カブトは変身が解け、天道に戻った。

その天道に、カスクワームの幻体が重なった。

「頼むっ・・・俺を封じてる・・・こいつをっ！」

幻体はそう言った。

「あ、あなたっ、あなたなの！？」

と、ウーマンは天道に駆け寄った。

天道はもがき苦しみながら、

「よせっ、出て来るな！」

と、内なるワームに怒鳴り付ける。

ガスッ！——ウーマンは天道の頭を殴った。

「うわっ！？」

天道は一瞬にして意識を失った。すると、天道の体がカスクワームに変態したかと思うと、直ぐに元の姿に戻った。

天道は目を開け、すっと立ち上がった。

「僕を出してくれてありがとう」

天道はウーマンにそう言った。

「貴方は私のたった一人の夫。困ってる時に助けるのは当然の事だわ」

ウーマンはワーム語でそう言った。

その時、黒装束の麗奈が二人の前に現れた。

「そいつに何をした？」

「何をつて、人間の心を潰してやっただけだが？」

と、ウーマン。

「何？」

麗奈はウーマンを睨み付けた。

「何だその目は？」

ウーマンは問うが、麗奈は無言でウカワームに変態した。

「ほお、私とやると言うのか？」

「待って」

天道は前に歩み出るウーマンを制した。

「君に戦わせる訳にはいかない。こいつは僕がやるよ」

天道がそう言うと、カブトゼクターが飛んで来た。

「変身」

と、天道はベルトにゼクターをセット。

「Henshin!」

天道は瞬時にカブト・マスクドフォームに変身した。

「キャストオフ」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

アーマーが吹き飛び、顎のローテートを基準にカブトホーンが起き上がる。

「Change beetle!」

と、ライダーフォーム移行完了の合図。

「クロックアップ!」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up!」

と、それを発動し、目にも留まらぬ速度でウカワームに襲い掛かった。

ウカワームはグラビティレベル数値を増大させ、クロックアップを発動し、カブトに応戦する。

両者は互角のパワーで、なかなか勝負がつかず、時間だけが刻一刻と過ぎて行った。

「Clock over!」

と、カブトがクロックオーバー。

続いてウカワームもクロックオーバーした。

「なかなかやるね」

カブトはそう言いながら、フルスロットルを押した。

「One two three!」

同じ頃、あっちの世界では・・・。

天道は何もない真っ暗な所にいた。

（こ・・・此处は？）

目を開けた天道は、辺りを見渡した。

（真っ暗で何も見え無い）

と、その時、天道の思いに応えるかの様に、辺りに背景が浮かび上がって来た。見渡す限りビルが建ち並んでいる。

「何なんだこれは！？」

天道は思わず口にした。

「君の心の中だよ」

突然、何者かが背後から天道に発した。

天道はその声が聞こえた方を振り向いた。

「誰だ？」

「寝ぼけてるのかい？君自身だよ」

そう言われても、相手はワームの姿をしている。簡単に信じれる訳が無い。

「俺自身だと？」

「そうさ。僕は君、言わばもう一人の君と言った所か」

「ならそのもう一人の俺に聞こう！」

何故ワームの姿をしている！？

「簡単だよ。僕が君に擬態したからさ。」

どうやら、オリジナルの方は殺し損ねてしまったみたいだね・・・

「」

「俺が、擬態された？」

「思い出せないなら、思い出さしてあげるよ」

そう言つてワームは、天道の顔面を手で掴んだ。

その瞬間、天道の脳裏に、7年の前の記憶が過ぎつた。

（っ・・・これは、あの時のか？）

7年前、天道は破壊される前の渋谷にいた。

その渋谷に、今、巨大な隕石が接近していた。

（何だあれ？）

天道は思った。

（まずいつ、こっちに来る！）

「総司！」

と、日下部 総一が天道の前に現れ、鉄壁となり、隕石から天道を守った。

二人は爆風で吹き飛ばされ、周囲は次々に破壊され、渋谷は完全に消滅。瓦礫の山と化した。

「そ・・・う・・・じ・・・こ・・・れ・・・を」

そう言つて総一は、天道にライダーベルトを手渡した。

「それ・・・は、将・・・来・・・お前の・・・役に立つ・・・筈だ」

総一はそう言い残し、息を引き取った。

「父さん？」

天道は総一に声を掛けた。しかし、総一の返事は無かった。

「父さん、目を開けてよ！ねえ！」

と、天道は総一を揺する。

その時、天道の背後にワームが現れた。

天道はそれに気付き、後ろを振り返った。

「何だお前は！？」

天道は問うが、ワームは問答無用で天道に襲い掛かった。

「うわっ！」

天道は頭を一発殴られ、気絶してしまった。

それを死んだと勘違いしたワームは、天道に擬態した。

「そんな馬鹿な！？」

現在の天道は思わず口にした。

「信じられないかもしれないけど、これが現実なんだ」

「嘘だつ、そんな事信じるか！」

そう言つて、天道はカブトゼクターを召喚し、カブト・マスクドフォームに変身した。（心の中なのに何故カブトゼクターが召喚出来るのかはこの際気にしないでおう。）

「往生際が悪いよ、日下部くん。君はワームなんだから、ワームとしてやって生きなきゃ」

ワームはカブトにそう言う。

「俺は誰の指図も受けない。俺の人生は俺が決める！」

カブトはそう言い、ワームに襲い掛かった。

「それを言つなら虫生こはづいふぢでしょ」

「五月蠅いつ、黙れ！」

カブトはそう言い、カブトクナイガン・アックスモードでワームを叩き付けた。

ワームはダメージを受けた。

「結構強いんだね……。でも、君は僕を倒せないよ」

「何？」

カブトの動きが止まった。

「だって、君は僕だもん。」

僕を倒すと言う事は、君自身も消えると言う事だよね。そんな事、君に出来る？」

「そんな脅し、俺には通用しない」

カブトはそう言い、ゼクターホーンを展開した。

「Cast off！」

アーマーが吹き飛び、顎のローテートを起点にカブトホーンをが起き上がる。

「Change beetle！」

と、ライダーフォーム移行完了の合図。

「クロックアップ」

カブトはサイドバックルを叩き、

「Clock up！」

と、それを発動し、目にも留まらぬ速度でワームに襲い掛かった。
「はっ！」

カブトはカブトクナイガン・クナイモードの刃をワームの腹に突き刺した。

「Clock over.」

遅れてグサツと言う音が聞こえた。

「俺の勝ちだな」

「仕方ない。潔く身を引かせて貰うよ」

そう言つて、ワームはカブトの前から姿を消した。

「でも、隙があれば僕が表に出るよ」

と、言い残して・・・。

「Rider kick!」

と、カブトは回し蹴りを放った。しかし、それはウカワームの顔面寸前の所で止まった。

「麗奈、何をしてる？」

カブトは足を降ろし、訊ねた。

「戻つて来たのだな」

「当然だ。俺は天の・・・」

「それは良い」

ウカワームは天に向かって突き立てたカブトの人差し指を掴んだ。

「己、人間の心が蘇るとは・・・」

ウーマンはカブトに飛び掛かった。

「はっ！」

カブトはウーマンに回し蹴りを放った。

ドーンッ！——カスクワーム・ウーマンは爆裂霧散した。

「良いのか？」

「俺は、お前とひより以外のワームは全て倒す」

カブトはそう言い残し、去って行った。

第31話：新たな敵

緑のサナギワーム<サリス>達がZECTの本部にせめて来た。

影山は慌てて表に出て、ザビーゼクターを召喚。

「変身！」

影山はザビーゼクターをザビープレスにセットした。しかし、マスキドライダーシステムが起動しない。

「ほお、変身不可か」

そう言つて現れたのは、やはり天道だった。

「仕方無い。脱皮する前に素手で片づけるぞ」

「そんな無茶な！」

「無茶なのは承知だが、やるしか無い」

天道はそう言つて、サリスの集団に飛び込んで行った。

「はっ！」

サリス一体を殴り飛ばす天道。しかし、サリスは全く怯んでいない。サリス相手に苦戦する天道。そこに、もう一体のサリスが襲い掛かった。

「ふっ！」

天道は素早く避け、サリスに同士討ちをさせる。

「俺はこっちだ」

天道はそう言つて、同士討ちをしている二体のワームに、蹴りを入れた。

その瞬間、後ろから別のサリスに突進され、天道は吹っ飛んだ。

「キリが無い……」

天道はそう呟き、カブトゼクターを召喚した。

「変身」

と、天道はベルトにゼクターを装着するが、マスキドライダーシステムが起動しない。

（こっちもか）

「ZECTの諸君。我々ワームに生身で挑むとは愚かだ」
その声と共に、サリス軍団の中からメガネを掛けた黒装束の男が現れた。

天道と影山は男の方を振り向いた。

「・・・乃木^{のぎ} 怜治・・・」

「指令官、ご存知なんですか？」

「ワームのボス的存在だ」

「これはこれは、カブトに選ばれし勇者、天道 総司殿」

と、お辞儀をする乃木。

「随分と礼儀が良いな。」

所で、何故貴様が此处にいる？」

「見て分らないかい？ZECTを乗っ取りに来たのだよ」

「貴様にZECTは渡さん」

「止めるつもりか？」

「止めてやる」

その言葉に乃木は笑い、指をパチンツとスナップした。

すると、乃木を含めサリスの軍団が姿を消した。

「消えた！？」

と、驚く影山。しかし天道は冷静だ。

そんな二人に、乃木の声が届く。

「ライダーの諸君、たった今ZECTは我々ワームが乗っ取った」

「指令官、どうしますか？」

影山はそう聞いたが、天道の姿は無かった。

「指令官どこ行っただんですか！？」

通路に沢山の遺体が転がっている。

天道は、その沢山の遺体を見つめていた。

（乃木 怜治目・・・）

天道は心の中でそう呟いた。

その天道に、一体のサリスが襲い掛かって来た。

それに気付いた天道は、素早く身をかわし、カブトゼクターを召喚した。

「一応やってみるか……。

変身！」

と、ゼクターをバツクルに差し込む。

「Henshin！」

マスクドライバーシステムが起動し、天道はカブト・マスクドフォームに変身した。

「はっ！」

カブトはサリスをカブトクナイガン・アックスモードで叩き付けた。サリスは真っ二つになり、ドカンッと爆裂霧散した。

カブトは変身を解除。指令室に向かった。

第32話：ネイティブ

天道は指令室に駆け込んだ。

「待っていたよ。カプトに選ばれし者、天道・・・いや、日下部
総司」

そう天道を出迎えたのは、やはり乃木 怜治だ。しかし天道は乃木
を無視。カプトゼクターを召喚した。

「待て、私は君とは戦いたくない」

「何故だ？」

「^{ワーム}仲間だからさ」

「確かに、俺とお前は同じ。だが、俺は全てのワームを倒さなくては
ならない」

「それは違うぞ？」

「君が倒すのは、ネイティブだ」

「どう言う事だ？」

「昔、火星にはネイティブと言う生物が棲んでいた。しかし、火星
は地球とは環境が違い、直ぐに荒れた星となってしまった。

それから暫くして、地球に人類が誕生した。

人類は地球を全ての生き物が棲みやすい環境にした。それを妬ん
だネイティブ達は、地球を侵略しようと、火星から地球に移住を始
め、人々を殺し、擬態をして人類の中に紛れ込んで行った。

その為我々は、引責に見立てた宇宙船を地球に発射し、ネイティ
ブを殲滅して行った。しかしネイティブは、ZECTと言う組織を
作り、人間を利用して我々ワームを葬り去って行った。

成す術を無くした我々は、クロックアップを使い、ネイティブを
殲滅する事にした。

が、ネイティブは今度、マスクドライダーシステムと言う兵器を
開発し、人間を利用して我々ワームを撃沈。我々は敗北への道を歩
む事になってしまった」

「そんなのデタラメだ！俺は信じない！」

「お前の両親は誰に殺された？」

その言葉に、小さい頃の記憶が頭に過った。

「俺の両親を殺ったのは、ネイティブだ。あれは確かにネイティブだ。そしてあの後、俺もネイティブに・・・っ！？」

天道は急に顔色を変えた。

（馬鹿な。なら何故俺がワームなんだ？）

天道は頭が混乱して来た。

「天道、お前はネイティブに利用されているのだ」

「俺が利用されてるだど？そんなバカな」

「なら確かめてみるが良い」

乃木はそう言うと、天道の前から姿を消した。

（確かめるって、どう確かめれば・・・）

第33話：最強のネイティブ

天道はその日、エリアXへやって来た。

その入り口にそびえる門の前には、二人のZECTルーパーが立って見張りをしている。

「此处は立ち入り禁止だ」

ZECTルーパーはそう言い、天道を足止めした。

「悪いが通させてもらう」

そう言っていると天道は、二人のZECTルーパーを気絶させ、門を開けて中に入って行った。

ガチャンッ！——三島は天道が監禁されている牢屋の鉄格子を開けた。

「今更僕に、何の用だ！？」

そう怒鳴り散らす天道に、三島は、

「君の力を貸して欲しい」

そう言つて、天道の手足に繋がれている鎖を外した。

するとそこへ、ちよつと太り気味の男が現れた。

「紹介しよう。根岸さんだ」

と、三島は男の名を言った。

「日下部君だったね。君は自分の正体を知っているかい？」

「僕は、ワームだ」

そう言う天道に三島は、

「お前は人間だよ」

「ぼ、僕が、にん・・・げん？」

「でもそれは昔の事。今の君はネイティブだ」

「覚えていないのか？我々がお前を使って数々の実験を繰り返して来た事を」

「そして君は立派なネイティブになった」

「成る程、俺をそいつに擬態させたのはそう言う事か」

そう言つて三島と根岸の前に姿を現したのが、天道だと言う事は言うまでも無い様だ。

「貴様、何処から？」

三島はそう訊くが、天道は無視してカブトゼクターを召喚。ベルトにセットした。

「Henshin!」

と、天道はカブト・マスクドフォームに変身し、ゼクターホーンを展開した。

「Cast off!」

アーマーが四方に吹き飛び、カブトホーンが起き上がる。

「Change beetle!」

カブトはライダーフォームに移行した。

「Clock up!」

サイドバックルを叩いたカブトはクロックアップを発動し、目にも留まらぬ速さで天道を救出し、エリアXを脱出した。

「Clock over.」

「奴が消えた!」

と、先程までいた筈の天道がいなくなっている事に気付いた三島は驚いた。

「カブトが連れて去りました」

ちっ!——三島は舌打ちをするとこう言った。

「何故止めなかった？」

「必要が無いからですよ」

「どう言う事だ？」

三島がそう訊くと、根岸は緑色の石を出して渡した。

「これは？」

と、三島がそれを手にすると、その石は独りでに発光をした。

「うわああああ!」

三島は悲鳴をあげた。

「貴様、何をした!？」

「それは人間をネイティブにする魔法の石。貴方には最強のネイティブになって貰います」

「うわああああ!」

三島は再び悲鳴をあげると、グリラスワームに変貌してしまった。

「シャーッ!」

グリラスワームは喉を鳴らすと、三島の姿に戻った。

「何故僕を助けた?」

天道はカブトに訊ねた。

「オリジナルだからな」

カブトはそう言い残すと、天道の前から姿を消した。

第34話：コーカサス登場！資格者はあの人！？

「麗奈、良い所であつた」

天道は偶々通り掛かった麗奈に声を掛けた。

「何か用か？」

「お前が誰かを狙うとしたら、誰を狙う？」

「それはどう言う？」

「ちよつと確かめたい事があつてな」

「確かめたい事？」

「ワームが何故人を襲うのか。それを確かめたい」

「成程、ならあいつはどうだ？」

と、麗奈は海を見つめている少女を指差した。

すると天道は、その少女に近寄つた。

「私に何か？」

少女はそう訊ねた。

バシッ！——天道はいきなり少女を殴り飛ばした。

怒つた少女は、

「いきなり何するのっ！？」

そう言つて、天道を睨みつけた。

「変身」

天道は召喚したゼクターをベルトにセットした。

「Henshin！」

天道はカブト・マスキドフォームに変身。カブトクナイガンを構えた。

（お前がネイティブなら、死んだら擬態が解ける筈・・・）
パアアンツ！——カブトは引き金を引いた。

少女の胸に小さな穴が開いた。

「何のつもり？」

そう口にした少女は、ネイティブに変態した。

「やはりな」

カブトはそう呟くと、クナイガンを手回させ、その刃でネイティブを叩きつけた。

ネイティブはドカンッと爆裂霧散。辺りにネイティブの肉の欠片が飛び散った。

それを見ていた麗奈はカブトに、

「どう言う事だ？」

と、近付きながら訊ねた。

「見ての通り、今までワームが襲っていたのはネイティブだ」

「そんなバカな!？」

「7年前、渋谷に落下したのは引責ではなく、俺達ワームの宇宙船その宇宙船は、ネイティブを抹殺する目的で送り込まれたものだった。」

危険を感じたネイティブはZECTを結成。人間を利用し、マスキュロライダーシステムでワームに対抗。

こうしてネイティブは、裏で人類ネイティブ化計画を着々と進行させて行った。

これが全ての始まり。俺達はネイティブに利用されたんだ。

麗奈、これからネイティブ殲滅を実行する。手を貸せ」

「復讐か、良からう」

と、その時、一発の光弾が麗奈目掛けて飛んで来た。

その光弾に気付いたカブトは、カブトクナイガンの引き金を引いた。

発射された光弾は、飛んで来た光弾を打ち消した。

「今撃った奴、出て来い!」

カブトがそう言うのと、

「Clock up!」

と言う電子音が聞こえた。

「きゃあっ!」

突然宙に舞った麗奈は、女性らしく甲高い悲鳴をあげた。

「麗奈！」

カブトは慌てて飛び上がると、麗奈を抱き抱えて着地した。

「Clock over」

その瞬間、カブトの目の前に、コーカサスが姿を現した。

「カブト、そいつはワームだ」

「それがどうした？」

「ワームは人類の敵。倒さなくてはならない」

カブトは麗奈を放し、

「なら俺はお前を倒す」

と、ゼクターホーンに手を掛けた。

「キャストオフ」

カブトはゼクターホーンを展開。

「Cast off！」

マスクドアーマーが吹き飛び、顎のローテートを基点にカブトホーンが起き上がり、コンパウンドアイが発光。

「Change beetle！」

カブトはライダーフォームに移行した。

「クロックアップ」

コーカサスはトレーススイッチに触れた。

「Clock up！」

クロックアップしたコーカサスは、目にも留まらぬ速さでカブトに接近。先制攻撃を仕掛けた。

しかしカブトは、その動きを確実に捕えており、避ける事など雑作も無かった。

「何っ！？」

攻撃が外れたコーカサスは、そのまま建物の壁にヒットした。

「Clock over」

「動きに無駄がある。資格者としては初心者と言う所か」

「黙れ！」

キレたコーカサスは、左手を上には伸ばした。すると、ハイパーゼ

クターがその手の中に現れた。

「貴様にそれは似合わない」

カブトがそう言うのと、ハイパーゼクターがコーカサスの手から消え、カブトの前に現れた。

カブトはそれを掴み、バックルに装着した。

「ハイパーキャストオフ」

と、ゼクターホーンを倒すカブト。

「Hyper cast off!」

その電子音と共に、カブトはハイパーカブトにフォームチェンジした。

「Change hyper beetle!」

「ハイパークロックアップ」

ハイパーカブトはハイパーゼクターのボタンを押した。

「Hyper clock up!」

その瞬間、ハイパーカブトの姿がコーカサスの視界から消えた。

「うわっ!」

突然、コーカサスが吹き飛んだ。

「Hyper clock over」

それと共に、ハイパーカブトが姿を現した。

「そ・・・それがハイパーゼクターの力か・・・。強すぎる・・・」

コーカサスはそう言うのと、変身を解いた。

「やはり、こっちの方が良いかもな」

資格者はそう言うのと、腰にオルタリングを出現させた。

「俺の名は騎馬^{きば} 龍。覚えておくんだな。

変身!」

龍はベルトの両脇にあるスイッチを押した。するとベルトの中央が発光し、龍はAGITΩに変身した。

第35話：ギルス現る（前書き）

あの人が出ました。しかし・・・

第35話：ギルス現る

AGITΩはハイパーカブトに襲い掛かった。しかしハイパーカブトは、軽々と避け、AGITΩに反撃をした。

「貴様、新種^{ワーム}か？」

「ワーム？そんなのと一緒にするな。俺はAGITΩだ」

AGITΩはそう言っていると、ハイパーカブトに足払いを掛けた。ハイパーカブトは足を払われ、ひっくり返ってしまった。

「トドメだ！」

と、AGITΩは一步下がり、ハイパーカブトが立ち上がったのを確認すると、ライダーキックを放った。

「はああああっ！」

AGITΩは奇声を発し、ハイパーカブトに接近した。が、何処からともなくギルスファイラーが伸びて来てAGITΩに巻き付いた。

「うわっ！」

巻き付かれたAGITΩは動きが止まり、地面に落下した。

「ちよつとアンタツ、関係無い人襲ってんじゃないわよ！」

そう言つて現れたのはギルスだった。

「まっ、真魚香！？

何でおめえ、この世界に！？」

「あんたを連れ戻しに来たのよ！」

ギルスはそう言つと、空間を裂いて別世界への入り口を開き、AGITΩと共にその入り口に入つて行つた。

「いてててて！バカっ、引きずつてる！」

「問答無用！」

ギルスはそう言つと、ギルスファイラーを引っ張つた。

「うわああああっ！」

AGITΩは悲鳴をあげながら、ギルスに引き寄せられた。

「元の世界に帰るわよ、龍」

そう言つとギルスは、別世界への入り口を閉じ、ハイパーカブトの前からAGITΩと共に消え失せた。

呆氣に取られたハイパーカブトは変身を解除。

「何だっただ、奴らは・・・」

第35話：ギルス現る（後書き）

何と、二話しか出番が無かった龍君。本編では活躍してね？

第36話：加賀美復活！ハイパー・ガタツク誕生

時は少し戻り、加賀美はトルビワーム・グスタの角に挟まれていた。

（くっ、このままでは殺られる！）

加賀美がそう思った時、

「Hyper clock over」

その音声と共に、鍬形をモチーフにした青いライダーが現れ、トルビワーム・グスタを殴り飛ばした。

「うわあああっ！」

トルビワーム・グスタから解放され、加賀美は空中へ投げ飛ばされた。

ライダーは、サイドバックルを叩いた。

「Clock up！」

その瞬間、ライダーの姿が消え、次の瞬間には加賀美をキャッチしていた。

「Clock over」

「お前、一体・・・？」

加賀美は問うが、ライダーは答えず、彼を降ろした。

（えっ？）

加賀美は、ライダーのベルトを見て驚いた。

（ガタツクゼクター？）

加賀美は、自分の手に握られているガタツクゼクターを見つめた。

（そんなバカな事が・・・？）

「後はお前の番だ」

ライダーはそう言うと、目の前に出現したハイパーゼクターをキヤッチし、加賀美に渡した。

「こいつを使えば、ハイパー・ガタツクになれるだろう」

ライダーはそう言うと、サイドバックルに装着されたハイパーゼ

クターのスイッチを押した。

「Hyper clock up!」

その音と共に、ライダーは消え失せた。

「何が何だか分からねえけど、やってやるぜ!」

加賀美はそう言つて、ガタックゼクターとハイパーゼクターをバツクルに装着した。

変身——と、加賀美の体は一瞬にしてマスクドアーマーに包まれた。

「キャストオフ!」

ガシャッ!——ガタックはゼクターホーンを展開。

「Cast off!」

その瞬間、装甲が弾け飛び、ガタックホーンが展開、ライダーフォームに移行した。

「ハイパー・・・キャスト・・・オフ」

ガタックは、ハイパーゼクターの角を、90度倒した。

「Hyper cast off!」

すると、ガタックは一瞬でハイパー・ガタックへと変形した。

「そんなバカなっ!?!」

トルビワーム・グスタは驚き襲い掛かったが、ハイパー・ガタックがハイパーゼクターのスイッチを押し、

「Hyper clock up!」

その瞬間、トルビワーム・グスタの動きがほぼ停止。

ハイパー・ガタックは、ゼクターホーンを倒した。

「Maxim, rider power」

その後、フルスロットルを、

「One, two, three」

と、連打してガタックゼクターのゼクターホーンを展開。

ガシャンッ!——ライダーパワーが蓄積され、

「ハイパーキック!」

と、再度展開。

「Rider kick!」

その音と共に、ハイパー・ガタツクは飛び蹴りを放った。

「Hyper clock over」

その瞬間、トルビフォーム・グスタは爆裂霧散した。

ビューン——ハイパー・ガタツクは光りを放って変身を解除した。

第37話：そして戦いは電王♀へ（前書き）

本日を持ってカブトは最終回とさせて頂きます。
理由は舞台を電王♀に繋げる為。それだけです。
では本編をお楽しみ下さい。

第37話：そして戦いは電王♀へ

雨が降る中、カブトは数百ものネイティブと対峙していた。
カブトクナイガンで一体ずつ倒している。

「クソ、キリがない」

「カブト、キャストオフしろ。クロックアップで一斉攻撃だ」
そう言ったのはカブトと共に戦っているウカワームである。

「キャストオフ」

カブトはゼクターホーンを展開した。

「Cast off」

アーマーが吹き飛び、カブトホーンが起き上がる。

「Change beetle」

それと同時にネイティブは一気に半分ほど減った。

「クロックアップ」

カブトはサイドバックルを叩いた。

「Clock up」

クロックアップを発動したカブトは目にも留まらぬ速さでネイティブを次々に攻撃。滅していった。

ウカワームも同様にクロックアップでネイティブを滅していく。

そして残り数体と言うところで「Clock over」とクロックアップが解除される。

カブトはゼクターのフルスロットル順番に押す。

「One two three」

ゼクターホーンを戻し、パワーチャージ。

「ライダーキック」

ゼクターホーンを展開してエネルギーを解き放つ。

「Rider kick」

その音声と共にライダーキックを発動したカブトは一直線に並ぶネイティブへと駆け、飛び蹴りを放った。

一体が爆裂霧散し、後ろに並ぶネイティブを巻き込み、連鎖爆破を起こした。

「見事だ」

とそこに現れたのは三島だ。

三島はニヤリと笑みを浮かべると、グリスワームへと姿を変えた。

カブトとウカワームは驚き戸惑う。

「はっ」

グリスワームが鉤状の触手を伸ばしてウカワームの腹を貫いた。

「うっ！」

呻き声を上げ、麗奈に姿を変える。

「麗奈！」

「すまない、天道」

麗奈はそう言っただけで倒れた。

触手を戻すグリスワーム。

「貴様、よくも麗奈を」

「お前の目は節穴か？俺はこの女を殺してはいない。こいつを埋め込んだだけだ」

そう言っただけでグリスワームが取り出したのは緑色の石だ。

「こいつはな、人間をネイティブに変える事が出来る魔法の石だ。

その石をワームに埋め込むとどうなるか、見てみないか？」

カブトは麗奈に目を向けた。

苦痛に悶えている麗奈。

「うっ、うわあああ！」

麗奈は悲鳴を上げながら角が生えたサナギ、ネイティブへ姿を変えた。

「立て、新入り。カブトを倒すのだ」

ネイティブは立ち上がり、脱皮してウカワームになり、カブトに襲い掛かる。

「うわっ！」

地面を転がるカブト。

「麗奈、俺が解らないのか!？」

「無駄だ、カブト。そいつはもうワームの心を失っている」

「クソツたれ!」

カブトは立ち上がってグリラスワームに駆ける。が、ウカワームに足を引っ掛けられて転んでしまった。

「終わりだな、カブト」

と、その時。

カブトの体から砂が出現して見た事もない怪物が姿を現した。

「俺の契約者に手を出すな」

怪物はそう言っただけでウカワームを腕で吹っ飛ばした。

「何だ貴様は!？」

「俺か？俺は――」

怪物は自己紹介をしようとしたが、何処からともなく流れてくる音楽によって掻き消されてしまった。

「ちっ、もう来やがった」

怪物がそう言っただけで、線路が出現し、電車がやってきた。

「な、何よこの戦闘現場っぽいところは？」

電車から降りてきた少女は辺りを見回してそう言った。

「おい、退け」

カブトは自分の背中に乗る少女に言った。

「あ、ごめん」

とカブトの上から退く少女。

「所で契約者は何処？」

その問いに怪物が「そいつだ」とカブトを指差した。

「人間、には見えないわね」

「ああ、そいつは人間じゃない」

そう言ったのはグリラスワームだ。

「誰あんだ？」

「俺は三島――」

と自己紹介中に少女はベルトを装着して赤いボタンを押し、ライダースをセタッチした。

「Sword form」

その音声と共に少女は電王ソードフォームに変身し、グリラスワームを蹴り付けた。

「俺、参上！」

とファイティングポーズを取る電王。

「お前が誰かは知らねえが何か邪魔だから消えてくれ」

そう言いながらデンガッシャーを組み立ててパスをセタッチする電王。

「Full charge」

電王は剣先を飛ばして振り回し、グリラスワームを滅した。

「次はお前だ！」

と続けて怪物を剣先で攻撃する。

「見せてやるよ、俺の必殺技。必殺、俺の必殺技、カブトヴァージョン！」

電王は剣先を振り回してカブトの顔を描いた。

直後、怪物は爆裂霧散した。

剣先を戻し、変身を解く電王。

「お、終わったのか？」

とカブト。

「邪魔したな」

少女はそう言うのと電車に乗り込んで去って行った。

「これで、戦う必要は、無いんだよね？」

カブトはゼクターを外して変身を解除した。

「天道」

と麗奈が蹠跟めきながら歩いてくる。

「麗奈、平気なのか？」

「ああ。どうやら、三島が消えたお陰で解放された様だ」

「そうか、良かったな」

「それにしても、先程の女は一体？」

「さあな。けど、お陰で世界は平和になった」

「なったな。これで私も星に帰れる」

「帰るのか？」

「お前も一緒にな」

麗奈は笑みを浮かべながら天道に手を差し出した。
天道はその手を掴んだ。

完！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127b/>

出ましたっ！仮面ライダーカブトZ

2010年10月10日21時39分発行